

童 心
滴るものは日のしづく静かにたまる眼の涙。

破調私見

敬虔なる自己観照を尊重し、自ら湧き上る心の韻律を隠約の間に捉へて静かに命ある言葉に移す可きは詩壇既に自由詩形の提唱あり。而も眞に内に省みて、外に句高き言葉を放つ人は少し。多くは粗品のみ。騷音徒に繁くして幽婉微妙の趣を缺く。詩は少くとも純朴不二なる神經と精靈の所有にして、因習と模倣と然らずんば徒に異を銜ふ概然者流の豪語とは相容る可きに非ず。眞の理解無くして眞の創造なければなり。近時短歌作者のある人々が破調を稱へて、而もその根本基調を既成の三十一音詩に則り、ただ一部の破調を新とし壯とするは卑怯未練にして、又殆ど内心の韻律を捉ふるに疎にして、不純限りなきは歎くべし。短才予の見るところに擗るもある種の少數なる逸品を除き、殆ど所謂破調の歌は從來の歌に如かず、さりとして新らしき詩に及ばず、而も自由にして完美せる小曲斷章の類よりも窮屈にして、潤澤遂に及ばず。た

だ韻律なき散文の一小破片に過ぎざる傾きあり。かゝる場合、人眞に能辯を思みて、ただ純中の純なる單心の叫びを自由にただ一息に歌ひ下さむとならば、寧ろ各種の鋭き新様の詩興に赴くべく、短歌なる既成概念は全然根柢より破壊すべきものならむか。

歌は類稀なる寶玉なり。小さく碧き寶玉なり。その寶玉の價値は眞にこの寶の句を理會する人にのみ貴し。その二千年來の寶玉を舊しとなす人は宜しく之を敬して遠ざくべく、強ひて棄てず、碎かず、ただ斑に傷けて之に僅少の彫琢を加へむとするは謬れり。

歌壇の推移は少くとも詩壇のそれよりも十數年遅れたり。明治短歌の改革も畢竟は贅澤なる無爲のすさびに了らむとす。而して歌は萬葉、詩は今日に到りて初めて近代の光と恐怖とを放たむとするなり。

さもあらばあれ、純なるものは句古くとも尊し、古りに古りたる寶玉も時にとりて愈新らしきことあり。信實には如何なる新奇も及ぶべからざればなり。これあるが故に奔放なる近代の騷客も、折にふれては完成完美したる抒情歌の悲しき古巢に歸らむとす。彼のアララギ一派の人の夙に萬葉集を尊崇し、念々三十一字の悲音に執して相離れざるは、ある信實なる意味に

於て最も畏敬すべきことなり。

(大正二年八月十三日)

木の葉のささやき序歌

われ、昨春、小笠原父島にあり。一日、島廳清瀬苗圃のなかにこもり、麗光のもと、靜心なき護謨の葉の囁きを聴く。法悦かぎりなし。乃ち聽光篇拾一首、今わが懐かしき『木の葉のささやき』の著者に寄せて、茲に多年の知己に酬ゆ。難有きは木の葉のささやき、心の心。光はただ深く耳傾ぶけて聴き惚るべし。光の揺れて音となる。既に木の聲ならず、白日障明かぎりなければ、そは凡て光のかがやく響なりけり。

麗らかなる空の光に聴き惚れつ何といふうつくしき眞晝なるらむ

澄みわたる光の中にそことなくかがやけるものの音のきこゆる

はつとして耳を澄ませばその音は木の葉ささやくこゑなりしかな

澄みわたる晝の日向の護謨畑何といふ寂しき音たつらむ

護謨の木の畑の苗木の重き葉の大きな葉のふとひびらぎぬ

肉厚く重き護謨の葉照り美し久なれば深き音たてにける

見るかぎり護謨の畑の護謨の苗光りかがやくささやきのうね

きこゆるは木の葉ささやく音ならでかがやけるものの響なりけり

光り澄み光り消えたるもの音追へばかなしもたまゆらなれど

晝深き光のなかにばつたりと護謨の厚葉が垂れにけるかも

改めて一首

わが友が深き心の心かも木の葉のささやき木の葉のささやき

(守田有秋氏著木の葉のささやき序)

詩集白金の獨樂序

われいま法悦のかぎりを受く、苦しみは人間を耀かしむ。空を仰げば魚天界を飛び、山上に
白金の耶蘇豆の如し。

大海のはてに煙消えず、地上に鳩白日交歡の禮を成す。林檎はじめて音し、水は常に流れて

眞實一路の心をあやまらず。麗らかなるかな、十方法界。わが身を周るは摩羅を頭にいたたく
暹羅佛、麥酒樽をこるがす落日光の男。桶の中に光りつめたる天の不二。海上遙かに光り匍ひ
ゆく赤子。或は又、大千世界の春の暮、空も轟るに耀き墜つる天魔の姿、善哉善哉。歸命頂禮、
今こそわれはわが手の獨樂を天にささげむ。白金の獨樂よ、光り耀け、かがやかに、光り澄め
かし、音もなく。光り澄めかし、音もなく。稽首再拜。

大正三年十一月下浣

わすれなぐさはしがき

少年老い易し、麗人は刻を千金の春夜に惜む。われらがわかき日の小詩はまさに涙を流して
歌ふべし。瑠璃いろ空のかはたれにわすれなぐさの花咲かばまた、過ぎし夜のはかなき戀も
忍ぶべし。ここに選び出でたるはわが幼きより今にいたるあらゆる詩集の中より、ことに歌ひ
易く調やさしき斷章小曲のかずかず、すべてみな見果てぬ夢の現なかりしささやきばかり、と

わすれなぐさはしがき

りあつむればあはれなることかぎりなし。かの西の國の詩人が

ながれのきしのひともとは

みそらのいろのみづあさぎ

なみことごとくくちづけし

はたことごとくわすれゆく。

と歌ひけむ。なにごとみながれゆく水のながれのひとふれのみ。忘れえぬ人びとよ、われらが
若き日は過ぎなむとす。嘆かば嘆け。羊の皮の手ざはりに金の箔押すわがこころ、思ひあがれ
ばある時は、紅玉、サファイヤ、緑玉、剛金石をも鏤めむとする、何といふ哀しさぞや、るりい
ろ空に花咲かば忘れなぐさと思ふべし。

大正四年四月

別離抄序

大正三年六月、我未だ絶海の孤島小笠原にあり。妻は曩に一人家に歸り、すでに父母とよろ
しからず。七月我更に父母の許に歸り、またわが妻とよろしからず。我は貧し、貧しけれども
我をしてかく貧しからしめしは誰ぞ。而も世を棄て、名を棄て、更に三界を流浪せしめしは誰
ぞ。我もとより貧しけれど天命を知る。我性玉の如し。我はこれ畢竟詩歌三昧の徒、清貧もと
より足る。我は醒め、妻は未だ痴情の戀に狂ふ。我は心より畏れ、妻は心より淫る。我父母の
爲に泣き、妻はわが父母を譏る。行道念々、我高きへのぼらむと欲すれども妻は蒼穹の遙か
なるを知らず。我深く涙垂るれども妻は地上の悲しみを知らず。我は久遠の眞理をたづね、妻
は現世の虚榮に奔る。我深く妻を憫めども妻の爲めに道を棄て、親を棄て、已れを棄つる能は
ず。眞實二途なし。乃ち心を決して相別る。その時の歌。(歌略)

眞間の閑居の記

大正五年五月中浣、妻とともに葛飾は眞間の手兒奈廟堂の片ほとり、龜井坊といふに、假の宿を求む。人生の命運定めがたく、因縁の數奇豫めまた測りがたし。森羅萬象日に新たにしていっしか春過ぎ夏來ると雖も、流離の涙かわく暇なく飛ぶ鳥の心いや更に泊る空なし。われ一人の女性を救ひ、茲に妻となして、永恒の赤繩を結ぶと雖も、いささかも浮きたる矜を思はず。人間の悲願いよいよに高けれども、又あながち世の鄙俗きを棄てず。赤貧常に洗ふが如く、父母にわかれ、弟妹にわかれ、いまだ三界を流浪すると雖も不斷の寛濶また更に美しからむ事をのみ希ふ。されば玲瓏として玉の如く、朝に起き、夕に寝ねて、いただくはありふれし米の飯、添ふるに一汁一菜の風韻、さながら古人の趣に相かなふを悦ぶ。まことや簡素は自然の徳、われ敢て強ひて銜はずとも、おのづから身に驕る實なければ、常住水に魚鱗の苔を洗ひ、野にいで丘にのぼりて、時に鮮菜の土をはたく。閑雅閑雅、われ汝を慕ふこと久し。願くば田園疎林の中、行往念々汝とともに處して閑寂さらに寂しからむ。

詩集月に吠える序

萩原君。

何と云つても私は君を愛する。さうして室生君を。それは何と云つても素直な優しい愛だ。いつまでもそれは永續するものでいつでも同じ温かさを保つてゆかれる愛だ。此の三人の生命を通じ、縦しそこにそれぞれ天稟の相違はあつても、何と云つてもおのづからひとつ流の交感がある。私は君達を思ふ時、いつでも同じ泉の底から更に新らしく湧き出してくる水の清しさを感じる。限りなき親しさと驚きの眼を以て私は君達のようにこびとかなしみとを理解する。さうして以心傳心に同じ哀憐の情が三人の上に益々深められてゆくのを感ずる。それは互の胸の奥底に直接に互の手を觸れ得るたつた一つの尊いものである。

私は君をよく知つてゐる。さうして室生君を。さうして君達の詩とその詩の生ひたちとをよ

詩集月に吠える序

く知つてゐる。「朱樂」のむかしから親しく君達は私に君達の心を開いて呉れた。いい意味に於て其後もわれわれの心の交流は常住新鮮であつた。恐らく今後に於ても。それは廻り澄む三つの獨樂が今や將に相觸れむとする刹那の靜謐である。そこには限知られぬをのきがある。無論三つの生命は確實に三つの据りを保つてゐなければならぬ。然るのちにそれぞれ澄みきるのである。微妙な接吻がそののちに來る。同じ單純と誠實とを以て而も互の動悸を聞きわけほどの澄徹さを以て。幸に君達の生命も玲瓏乎としてゐる。

室生君と同じく君も亦生れた詩人の一人である事は誰も否むわけにはゆくまい。私は信ずる。さうして君の異常な神經と感情の所有者である事も。譬へばそれは憂鬱な香水に深く涵した剃刀である。而もその豫覺は常に來る可き悲劇に向て顛へてゐる。然しそれは恐らく凶惡自身の爲に使用されると云ふよりも、凶惡に對する自衛、若くは自分自身に向けらるる懺悔の刃となる種類のものである。何故なれば、君の感情は恐怖の刹那に於て、正しく君の肋骨の一本一本をも數へ得るほどの鋭さを持つてゐるからだ。

然しこの剃刀は幾分君の好奇な趣味性に匂づけられてゐる事もほんたうである。時には安らかにそれで以て君の薄い髻を當る。

清純な妻さ、それは君の詩を読むものの誰しも認め得る特色であらう。然しそれは室生君の云ふ通り、ボオやボオドレエルの妻さとは違ふ。君は寂しい。君は正直で、清楚で、透明で、もつと細かにびちびち動く。少くとも彼等の絶望的な暗さや頹廢した幻覺の魔睡は無い。宛然涼しい水銀の鏡に映る剃刀の閃めきである。その鏡に映るものは眞實である。そして其處には玻璃製の上品な市街や青空やが映る。さうして恐るべき殺人事件が突如として映つたり、素敵に氣の利いた探偵が走つたりする。

君の氣稟は又譬へば地面に直角に立つ一本の竹である。その細い幹は鮮かな青緑で、その葉は華奢でこまかに動く。たつた一本の竹、竹は天を直觀する。而も此竹の感情は凡てその根に沈潜して行くのである。根の根の細かな纖毛のその岐れの殆ど有るか無きかの毛の尖のイルミ

ネエション、それがセンチメンタリズムの極致とすれば、その毛の尖端にかちりついて泣く男、それは病氣の朔太郎である。それは君も認めてゐる。

「詩は神秘でも象徴でも何でも無い。詩はただ病める魂の所有者と孤獨者との寂しい慰めである。」と君は云ふ。まことに君が一本の竹は水面にうつる己が影を神秘とし象徴として不思議がる以前に、ほんたうの竹、ほんたうの自分自身を切に痛感するであらう。鮮純なリズムの獻歎はそこから来る。さうしてその葉その根の尖まで光り出す。

君の靈魂は私の知つてゐる限りまさしく蒼い顔をしてゐた。殆ど病み暮らしてばかりゐるやうに見えた。然しそれは眞珠貝の生身が一顆小砂に擦られる痛さである。痛みが突きつめれば突きつめるほど小砂は眞珠になる。それがほんたうの生身であり、生身から滴らす粘液がほんたうの苦しみからにじみ出たものである事は、君の詩が證明してゐる。

外面的に見た君も極めて瘦せて尖つてゐる。さうしてその四肢が常に鋭角に動く、まさしく竹の感覺である。而も突如として電流體の感情が頭から足の爪先まで震はす時、君はびよんぴよん跳ねる。さうでない時の君はいつも眼から涙がこぼれ落ちさうで、何かに縋りつきたい風である。

溼癖で我儘なお坊つちやんで(この點は私とよく似てゐる。)その癖寂しがりの、いつも白い神經を露はに顫へさしてゐる人だ。それは電流の來ぬ前の電球の硝子の中の顫へてやまぬ竹の線である。

君の電流體の感情はあらゆる液體を固體に凝結せすんばやまない。竹の葉の水氣が集つて一滴の露となり、腐れた酒の蒸氣が冷たいランビキの玻璃に透明な酒精の手を形づくる迄のそれ自身の洗練はかりそめのものではない。君のセンチメンタリズムの信條はまさしく木炭が金剛石になるまでの永い永い時の長さを、一瞬の間に縮める、この凝念の強さであらう。摩訶不思議なる此の眞言の秘密はただ詩人のみが知る。

月に吠える、それは正しく君の悲しい心である。冬になつて私のところの白い小犬もいよいよ吠える。晝のうちは空に一羽の雀が啼いても吠える。夜はなほさらさらきらきらと霜が下りる。霜の下りる聲まで嗅ぎ知つて吠える。天を仰ぎ、眞實に地面に生きてゐるものは悲しい。

びようびようと吠える、何かびようびようと吠える。聴いてゐてさへも身の痺れるやうな寂しい遺瀨ない聲、その聲が今夜も向うの竹林を透してきこえる。降り注ぐものは新鮮な竹の葉に雪のごとく結晶し、君を思へば蒼白い月天がいつもその上にかかる。

萩原君。

何と云つても私は君を愛する。さうして室生君を、君は私より二つ年下で、室生君は私より又二つ年下である。私は私より少しでも年若く、私より更に新らしく生れて来た二つの相似た靈魂の爲めに祝福し、更に甚深な肉親の交歡に酔ふ。

又更に君と室生君との藝術上の熱愛を思ふと涙が流れる。君の歡びは室生君の歡びである。さうして又私の歡びである。この機會を利用して、私は更に君に讚嘆の辭を贈る。

大正六年一月十日

葛飾の紫烟草舎にて

(萩原朔太郎氏著月に吠える序)

愛の詩集のはじめに

室生君。

涙を流して私は今君の双手を捉へる。さうして強く強くうち振る。君は正しい。君の此詩集は立派なものだ。人間の魂で書かれた人間の詩だ。さうしてここに書かれた君の言葉は盡く人間の滋養だ。君の魁りは勇ましい。さうして純一だ。魂は無垢だ、透明だ。おお君は安心して君自身を世に示したがい。さうして更に世の賞讃と愛慕とを受けたがい。おお、上天

愛の詩集のはじめに

の祝福よ、永久に我友の上にあれ。

愛の詩集一卷。之は何といふ優しさだ、素直さだ、氣高さだ、清らかさだ。さうして何といふ悲しさ、愛らしさ、いぢらしさだ。おお、ここにはあらゆる人間の愛がある。寂しい愛、孤獨の愛、眞實の愛、幸福な安らかな愛、正しい愛、虐たげられ、呵責まれた愛、憐憫の愛、神のやうな愛、健やかな惠深い愛、忍従の愛、寛大な、而して叡智の潜んだ愛、自然の愛、新鮮なみづみづしい愛、善良で正直な愛、素朴な野生の愛、深大な愛、一人の、而して萬人の愛、おお、さうして一切の愛、これらが皆この中にある。さうして凡てが神の魂を有つた人間の安らかな良き心から流れ出てゐる。

何等の無理もない、その言葉は何等の飾りもなく、しぜんと魂の底から、一人の人間の静かな息づかひその儘に溢れ出てゐる。誰にもわかり易い言葉でわかり易く度ましまやかに語られてある。

誰が讀んでも、誰に讀んできかせても、それは深い滋味のある言葉だ。誰しもが温められ、

かき擁かれ、慰められ、力づけられる言葉だ。淫らな、何ひとつ不純な聲が無い。これは水だ、いい茶だ、魂のパンだ。さうして日の光だ、雨の音だ、清しい草花のかをり、木の葉のそよぎ、しめやかな雲、雪の羽ばたきだ。おお、さうして貧しい者には夕の赤い燈火であり、富みたる人には黎明の冷たい微風となる。さうして生れてくる者には温かい母の頬すりを、病める者には花、寂しい者には女性を、さうして又死なんとする者には何もものにもまして美しい蒼空の微笑を、おお之等は示す。

何といふ力づよさだ。又、何といふ初初しさだ。室生君。君はいい心境に落ちついた。君のこれ等の詩は淑やかに讀んでもいい、聲あげて讀んでもいい。庭園の朝、木蔭で一人で讀んでもいい。晩餐の後、家族擧つて楽しく讀みあつてもいい。全く誰が手に執つても、どの頁を開いても愛撫される。

これは水だ、いい茶だ、魂のパンだ、人間の滋養だ。

X

宇生君。

萬法は流轉する。希臘の古哲 Herakleitos の此の言葉は洵に眞理である。現世は無常であるが、それが故に私達も茲に新たに轉生して、改めて神の榮光に浴する事を得た。この私達を生み出した大自然の力と愛とを思ふ時私達の頭は下る。永劫を一瞬に縮めて光るこの生命、この人間の魂は愛なしには片時も生きられぬ。詩人は上天の恵みにより、殊に選ばれたる人間の中の最も高貴なる人間である。私達は身にあまるこの恩寵を等閑にしてはならぬ。

私達は何が故に苦しむか。何が故に自らを虐たげ、自らをさいなみ、自らの血を流し、身肉をこれ絞るか。省れば人間の心は淺ましく仰ぎ見すれば涙である。掌を合して祈り、祈つてただ己れの至らぬ事を恥づる。ただ大慈大悲の御心に縋るより途は無い。切々として湧き上るこの感謝の念、抑へても抑へきれぬこの念。

神は愛也。君が聖書を尊崇し、偉大なるドストイエフスキーの苦悶と信仰とに感激する嬰兒のやうな心はここから起る。君の永い間の焦燥、憂慮、省察、求信、之等は決して徒事では無

かつた。孤獨も貧窮も耐忍も決して無爲では無かつた。今は確乎として君は目ざめた。これからである。何事もこれからである。

思へば基督は君の爲めに矢張り君の魂の父であつた。萩原君の云ふ如く、而も君は生れ乍らにして神の愛を體得した人の一人であつた。それは詩人としての天稟である。玉のやうな良き素質である、良き素質ほど貴いものはない。常人は教養と苦業とに依つてはじめて神の御心を悟る。然し乍ら詩人の靈性は受胎の抑々から既に神の御聲を聴く。純眞にして無垢だからである。君も無垢であつた。野生の儘で、素朴で、飽迄も正直で、單純で、又をかしいほど露骨で、男らしく育つて来た。君の感情は蕃人のやうに新鮮で、君の魂はいつも鷺鳥の卵のやうに牧草と地面の間に轉がつてゐた。君の感覺も神經も其處で自然のままに曝され鋭く削られて来た。而して時として稚氣を帯びた淫心からこづき廻はされたり、處女のやうに怖怖したり、又は凶惡の假面を装つたり、嫉妬したり、狂つたり、踊つたりした。今でも君は全くの自然兒である。何れにしても君は何も彼も六官も七情も靈魂も肉體も剝き出しである。

愛の詩集のはじめに

その自然兒が一面に於て熱烈な文明の思慕者であり、秩序ある諸徳、中にも貴族的品格と正しい禮節とを憧憬し、之に己れを則らんとする無邪氣と、謹慎と、謙讓とは、人をして如何なる時も彼を愛さしめ、微笑させずにはおかぬ。室生君、私の言葉は稍過ぎた。然し乍ら、君の天稟の樸直と意識せざる品位の貴さが、日を追うて君自身を洗練し淨化して來たのである。而して愈君の魂は正しく調節され、次第に愛と靜謐と山羊の眼のやうな柔和の中に澄みきつて來た。さうして眞の禮儀と規律とが君の現在の禁慾的生活に自らなる良き整形を爲す、かうして此の愛の詩集が生れたのである。

室生君。

何と云つても私は君を愛する。さうして萩原君を。君と萩原君とはまことに靈肉相通じた藝術的雙生兒である。その何物にも代へ難い愛情、激烈なる相互の崇敬感激、之を二魂一體と君等は云ふ。まさしく君等は兩頭の奇性兒である。相愛し相交歡し乍ら、君等はその氣稟に於て、思想に於て、趣味、並びにもろもろの好惡に依つて、寧しる血で血を洗ふ肉親の仇敵の如

く相反し相闘ふ。

君は健康であり、彼は纖弱である。君は土、彼は硝子。君は株の蠟燭、彼は電球。君は曠原の自然木、彼は幾仙學式庭園の竹、君は逞ましい蠻人、而して彼は比喩的利性の文明人。君は又男性の剛氣を保ち、彼は女性の柔軟を持つ。君は貴族の風格を尙び、彼は却て純樸なる野趣を戀ふ。而も兩者が人間として眞の理解と徹底した性愛の上に、一の赤い心臓を他の蒼い心臓の上に、壓し重ねて、等しく苦しみ等しく歎歎しつつある。何と云つても君等は永久に離れられない胴體であり、同じ濕婆神の變化である。

おお、さうして私は君等の何れもを愛する。愛せずにはゐられない私は、君等の相反した凡てを、驚くほど私自身の中に見出す。それは密度に於ては、或は君等の何れもより薄いかも知れぬ。然しながら、此の三人は根本に於て一つである。私達は同じく同じ神の聲を同じ母胎の中で聴き、同じ血の鼓動を聴きつつ輪廻轉生の絶大苦悶から一時に一切の因縁を忘れて了つたのである。私達は永い間盲探しに探し廻つた。さうして私から室生萩原と順順に目を開いて、ま

た再び相擁いたのである。私達はまさしく無垢であつた。子供らしく純一で、而も何もものよりも優れて透明で、心は常に天の藍色を映してゐた。おお、此の單純にして誠實なる三人の愛、この愛は互に互の動悸を聴きわけけるほどに澄徹で、又、互の胸に互の手を直接に觸れ得るほどに緊密だ。『月に吠える』の序、あれに私はかう書いた事がある。おおこの三人、それは廻り澄む三つの獨樂が今や將に相觸れむとする刹那の靜謐である。おお、その微妙なる接吻。

X

室生君。

私は曾て萩原君の天稟を指して、地面に直角に立つ華奢な一本の竹であると云つた。而も君は喩へば一本の野生の栗の木である。

一本の野生の栗の木。

栗は天然の光と雨露の恵みと地壤の慈みとに依つて先づ青い二葉を開いた。未生以前よりこの耀やかなしい地上に生れて來なければならぬ因縁が、時を得て初めて栗の芽生となつて顯現

されたのである。好運がその芽を祝ひ、微風がその初毛をそよがした。さうしてその芽は莖は生れた儘何らの工みも妨げもなくすくすくと生ひ立つた。凡てが祝はれた儘であつた。さうして凡てが彼の伸びる儘であつた。凡てが自由で朗らかで愛に満ち亘つてゐた。水はその根を廻つて曠い野つ原を流れ、蒼い空の圓天井は常住その上にあつた。

夏が來た。幸福な栗の若木はこの時銀のギザギザをつけた鮮緑の若葉を一齊に萌え立たせた。それは細細とした瑞々しい若葉であつた。その若葉を渦卷かせ乍ら、栗はまだ枝々の尖りが眩しかつたり、腋の下が羞痒ゆいやうな新生の歡びから何も彼も涙ぐましく眺め入つた。さうして夕霧がかかると感傷し、朝風がそよぐと小躍り、細い弦月がきらめくと、巳れから感極つて啜り泣いた。

それから一年経ち、二年経ち、五年経ち、十年経つた。

栗の木はいつしかガツシリした姿勢と粗々しい木肌とを持つた立派な一本立の木になつた。さうして愈激しい生長の慾望と愛と力とに燃え上つた。のみならず、曠野の風景が愈彼の爲めに新らしくされ、野末を通る人馬も自づから彼の姿を振り返つてゆく。さうしてゴツホの燦

きつくやうな太陽が東にあがり西に赤々とくるめき廻る真ん中で、この大麻栗の緑葉の渦巻に、眞つ白な花穂がいくつもいくつも垂れ下つて、まるで妊娠になつた綿毛のやうに重々しく咲き盛つた。その淫蕩無比の臭氣、その狂熱、その豊満、將に此の樹の放つ動物的精液の激臭は下ゆく人をして殆ど昏倒せしめずんばやまなかつた。雨の夜などは殊更である。その彈ちぎれるほどの淫心。而も此の栗の木を前にして、眞赤なえんえんたる天鵝絨の坂があり、坂の上には丘があり、麥島があり、麥島には麥が穂をそろへて揺れたり光つたりする清明な小景があつた事も讀者よ記憶せよ。晝はその麥の穂立の中に基督のかけが見え隠れ、夜は祈りの鐘の音が、薄靄の間を縫つて靜かに栗の木のとこまで流れて來た。

それから陰鬱した長雨が幾日も幾日も降り續くと、花は腐れて地に落ち、栗は再び目醒めたやうに眞つ青に濡れしづき乍ら、日が照りつけると、更に又、一層の鮮かさを以て輝き出したのである。

愈秋になつた。思ひがけない大暴風雨が殆ど神意の如く此の一本立の栗の枝々を吹き捲つた。弱い葉や既に枯れかかつた病葉は一溜もなく八方に飛び散り、木は根から大揺れに揺れる、抗す可らざる大自然の意力に恐れをのく栗の葉の間に、この時、數知れぬ青栗の青毬が、密かに密かに生れつつあつた不思議さを思ふと誰しも涙なしにはゐられまい。それはそれは小さな小ひさな青い栗の果であつた。

大暴風雨が止むと、空は再び碧瑠璃に晴れ渡つた。玲瓏隈もなしである。十月初旬の月光は更に遍ねく栗の全身に降り注ぎ、その光は次第に栗の果を膨らめてゆく。青い栗の毬、毬は鮮やかに滴る光を痛感した。

その頃から水蒸氣が深く立ちこめ、四圍の夜景が穩かになる。秋雨がかかる。赤い燈が丘の間から囁きかはず。野菜畑が香氣を吐く。おおさうして晝も白い月が幽かに残り、百姓の豊かな挨拶があちこちできこえ、朝もいよいよ涼しくなる。凡てが柔かく肅やかに、さうして澄みかかつて來た。その中に立つ栗の木の幸福な愛、さうしてその祈念、野生の儘の淨化。

その栗の木は君である。

君の詩の生ひたちを私は假りに三期に分つ。『朱樂』の抒情小曲その他はさしづめ栗の若木の

新芽である。それは雋鋭で、極めて感傷的であつた。而も新しい叡智の瞳はその芽の心に既に幽かに光つてゐた。その驚異。

第二期は君として最も奔放な慾念と良心との混乱時代であつた。萩原君は之を指して色情狂的情調、或は凶暴的無智と云ふ。これは稍激し過ぎる。然し全く當時の君は彼の栗の花の淫蕩粗雑な花盛りと酷似してゐたのだ。而も君は基督を天の一方に見、喧燥の巷に神の聲を聴く良き魂を持ち乍ら、盛んに密室の秘戯を空想し、更に悪魔的趣味性の好奇心を少しも制御し得なかつた。時として君は黒い覆面をかけ、手中に見えざるピストルを閃めかし、盗心を神聖視し、憔悴しては銀製の乞食となつて彷徨ひ歩るき、消え失せんとしては純金の蝸の聲を松の梢に聴いた。酒に酔つて人を毆打き、女の足を拜み、夜赤い四角の窓を仰いで淫獸の如く電線を傳つて忍び込んだのも君だ、幻覺中の君であつた。かくして君の白い兩掌は常に生々しい鮮血の粘りを滴たらしてゐた。が、おおその鮮血は決して殺人の夢ではなかつた。十字架上の基督の兩掌の釘の跡であつた。釘から噴き出る貴い犠牲の血潮であつたのである。此時君の呼吸は最も狂つて大きく、君の奔騰したりリズムは縦横無碍に亂舞の極を盡した。此時だ。君の

善も悪も美も醜も憚る處なく白日の下に投げ出された、此時だ。君は全く活躍し、赤裸々であつた。君の詩は最も放縱に、最も豊滿に、最も魔氣と魅力とに驕つてゐた。さうして稀に見る人間の眞實がその中に却て地蟲の聲のやうに闇の奥底からきこへてゐた、その惱ましき、惑はしさ、物悲しさ、その時の君のすばらしさ。

ああ、さうして野つ原の栗の木には思ひがけない大暴風雨が來た。あらゆる人間の苦惱に堪へ忍んだ心靈界の巨人ドストイエフスキイの悲歎と懺悔と教化とは雨となり嵐となり涙となつて迷へる者の上に殺倒した。栗の木には青い栗の青毬が密かに密かに生れんとするその時だ、その第三期の新生の曙を君は、盡く涙を以て語り得る。

愛の詩集はかうして成つた。

栗の毬は粗い、けれども鮮かだ、純緑だ、一本一本が鍼のやうに細い。栗の果は固い、けれども齧れば齧むほど滋味が出る、純白だ。栗の果は君の魂だ、君の詩だ。

室生君。

愛の詩集のはじめに

更に君の感情の表現法に就て、私にもう一つ云はしてくれ。

君の本然の魂に於て然るが如く、全く言葉の上にも君は自然兒であつた。野生であつた。君のリズムの新鮮と自由とはそこから来る。元より何の苦勞も澁滯も君には無い。初めから君はあらゆる因襲と患はしい羈絆から綺麗に離脱してゐた。否、殆ど關知しなかつたと云つていい。何といふ仕合せだ。君は君自身で、君のリズムは君より外に遣る人は無い。生生としてゐる。翻つて私達はなまじ古典を崇拜し、秩序ある傳統の教養を受け、その畫のやうな象形文字の輪廓、若くはその音律の齋らす古蒼、莊嚴、或は簡素、幽婉、微趣のかずかすにあまりに深く薰染し過ぎて來た。それ丈老い痴れた妖魔の水管と誘惑から逃れ出づる事は容易で無い。而して、血の通つた水々しい自己一人のリズムを創造するには君達の知らぬ困苦と反抗と勇氣と冒險とを経て始めて爲し得たのである。而もなほありあまる愛着と未練と淫情と臆病とに後髪を絶えず曳かれつつ踉蹌として進むに進むに進めぬ慘めさ。苦しみ抜いた。私は全く苦しみ抜いた。さうして漸く今在る處まで行き着いた。それを君は殆ど何の苦しみもなく歩いてゆく、何にも知らぬ子供のやうな心で進んでゆく、羨ましい事だと思ふ。

然し、たつた一言云はしてくれ、君の言葉はまことに素朴で自然ではある。心の儘に流れ出でゐる。日常の言葉通りである。然し藝術の妙機は一面「味ひ」であると云ひ得るならばその味ひは詩ならば矢張りその言葉に頼らなければ噛みしめられぬ。句があり色ある言葉、節約し廻轉さし弛緩さし壓重し昂騰せしむるリズム、それらは座談の平語とは異ふ。詩はやはり詩である。

愛あるところに言葉あり、その言葉である。愛は説く事はできる。然し愛の味ひ、人情の眞の味ひに理も非もなく人をして泣かせ、踊らせ、笑はせ、怒らせ、眠らせ、安らかに落ちつけ、はては頭を垂れさせるだけのリズムと言葉、その言葉そのリズムが詩には何よりも必要ではあるまいか、その魅力、その尊さ、その怪しさを又何より尊しとせねばなるまいと思へる。

私は日本の言葉は鑽だと思へる。玉と爲すにはまだまだ不蕪の琢磨と陶冶とを念とせなければならぬ。鍊金道士の苦しみを苦しみとするのはこれが爲めである。血を流し身を絞るのもこれが爲めである。技巧は飾りでは無いが、それ丈の音律の苦勞は必要である。君は安らかに言をいふ、それもよい。なだらかに説く、それもよい。然し兎もすると、今の君の言葉は流れ過

ぎる。詩が散文でない限りより一層のリズムの純化を私は君に欲する。切に切に祈る。

更に私の君に願ふ處は君の現在の心境に、もう一度彼の既往の熱と力と美と露骨と、又彼の驚くばかりの魅力あるリズムと、生の儘の神経と感覚と、寧ろ淫するばかりの空想と狂氣のやうな幻覺と醜と野蠻とを思ひきり復活さしてくる事である。加へて深刻なる音樂の重壓と殘虐なる感情の蠢惑とを彌が上に押し出してくれる事。取り澄ましてくれぬ事。ドストイエフスキイに對する盲目的感激から、眞の君自身を、君の愛を隔離し、愈君本然の眞の道に立たむ事である。

さうしたら君の詩は愈素晴らしいものになるに違ひない。その時こそ君は大成される。今や魂の眞の革命が君の心に起つた。而してこの次に來る可き光榮ある第二次の革命が愈君を權威ある詩壇の眞人たらしめる事と信ずる。私は君の現在を祝福し、更により多くその未來を翹望する。

室生君。

X

何と云つても此詩集は立派だ。矢張り何と云つても正しいものは正しい。之は全く人間の言葉で書かれた人間の詩だ。さうしてここに書かれた君の言葉は全く人間の滋養だ。君の颯りは勇ましい。さうして純一だ。魂は無垢だ、透明だ。おお、君は安心して君自身を世に示したがい。さうして更に世の賞讃と愛慕とを愛けたがい。君は何と云つても私の友だ。萩原君と君と。おお今こそ再び私は涙を流して君の双手を捉へる。さうして強く強くうち振る。おお、上天の恩寵よ、永久に我友の上にあれ。

(室生犀星氏善愛の詩集序)

千九百十七年十一月十六日

食後の歌序

世に奇異なるは『南蠻寺門前』『ドウバンの首』『硝子問屋』の作者、而して『綠金暮春調』『食後の歌』の詩人、わが友木下空太郎の若き日の行狀であつた。

彼は彼の身邊を修飾するに一見質實にして訥朴なる黒い鍔廣帽子に黒の背廣とを以てしたに

食後の歌序

過ぎなかつた。時としてはまた黒に金釦の大學々生の制服さへ着けて拮屈としてゐた。彼は常に陰愁に満ち、氣六づかしく、潔癖にして謹直、また倏ちに顔を赤める處女の恥羞をさへ感ぜしめた。

彼の服装はかくのごとく黒く、而も亦衲朴ではあつたが、彼の服装は全く三角稜の多彩、彼自ら謂ふ所の萬華鏡の複雑光で變幻極りなかつた。聲色香味觸、是等悦喜す可き官感の種々相に於て、彼は全く、初めて碧眼紅毛の邪宗僧を迎へた長崎青年のそれらの如く、時としてはまた初めて此の浮世繪の日本に面接した西域人のそれらの如く、事毎に驚異し、瞠目し、仰視し、鑑賞し、遂には彼自らをその恍惚無礙の極樂世界に魔睡せむとさへ欲するに到つた。

然し乍ら、茲に考ふべきは彼は此の魔睡し陶酔せむと欲したにかかはらず、彼は彼自身を遂にはその沈湎の底に見出さねばならなかつたほどの其の官感の幻法から、不思議にも自ら感齟せられない聰明と理義との保持者であつた。彼はこれらの鴉毒の耽美者發見者ではあつたが、彼自らを決してその鴉毒の爲めに殺す癡愚と溺没とを敢て爲なかつた。おお、此の七彩陸離な

る不可思議國の風光の中に在つて、常に黙々として手に太き洋杖を握りつつ徘徊する長身黒服の異相者、彼木下李太郎の澁面を見よ。

無論、彼にはその幼時よりかの不可思議國に對する熱烈なる思慕と憧憬とがあつた。彼は常にその發見者としてその熱意と歡喜と矜驕とを以て、絶えず探索し涉獵した。かくして彼はたゞ轉々として彷徨し漫歩した。時によりては調子はづれの焦燥と亢奮とが、決して彼をその一點に執念く佇立させては置かなかつたほど。だが、かゝる刹那に於てすらも彼内面の眞實はまた絶えず暗い寂しい人面痘の如く彼が肉身について離れなかつたのである。

彼は種々の舶來品——それは珍奇なる多種多様のエチケツテ、南蠻の異聞、ギヤマン、香料、異酒、奇鳥、更紗の類——を吾徒の間に齎らした。のみならず、彼はまた絶えず、その特殊なる紅毛舶來の感覺を以て、新様の日本、油繪の江戸、銅版の長崎、メッサの小土佐、薄荷酒中の鎗さび、西班牙外套の花の昇菊を發見し諦聽した。あまつさへ彼は、清親の錦繪の中に所謂

文明開化のモンマルトルの酒舗を漁り、紅提灯と紙の櫻のかけに、かの阿蘭陀のラペイカ弾きの如く、椅子の上にロチの女を乗せ、而してしみじみと夜の三味線を爪ぐらせた。

彼は比類稀な詩境の発見者であつた。だが惜しい事にはあまりにその効果を整理爲ようとしなかつた。彼の逐次の新発見は殆ど目まぐるしいばかりであつた。だが彼はたゞ前へ前へと前進するばかりであつた。だから彼の背後には、常に勿體ない程複雑は複雑の儘に、美は美の儘にただ燦々爛々と取り散らされてあつた。

たとへて云へば、彼は驕奢と眩耀とに燃え狂つた珍草奇木の間を、金弧を描く一羽の班猫光の如く、それからそれへと花粉にまみれてまた未見の新世界へと飛び去つて了ふのであつた。だが彼が佛蘭西近代詩苑に於ける鬼才ラムボオの如き驚くべき官感的発見者であり、同じくその収収家で無かつたとしても、それは却て彼の詩人としての獨自性優越性を證左するものにならぬ。

再び云ふ。世にも奇異なるはわが友木下李太郎の若き日の行跡であつた。彼はまことに極秘

境の憧憬者であり、最も進むだ美の探検者ではあつたが、遂に彼自身は邪宗の法皇に六年の長日月を奉仕して遂に清浄な個の童貞として老いて了つた、支倉六右衛門の如く、結局謹嚴な淨身の童貞として彼は彼自らの青春の初期を空にして了つた。

麗明にして柑子實る異國趣味の海港に生れ、西域の教養と官感とを修練し來つた彼が如き青年と、もともと長崎の近海に生れ、かの阿蘭陀藝術の餘香に直接薫染して育つた邪宗系のトンカジョン予が如きとが、その當時一見して共鳴し感激し歡喜し合つた事は當然であつた。予等は無論互に刺戟し合ひ、影響し合ひ、熱狂し合つた。

予等が狂飈時代はかくして豪華であつた。Panの盛宴はかくしてその驕奢の絶頂に達した。

彼が詩の本領は主として『綠金暮春調』に於て見る可きである。然し乍ら、彼の小吟竹枝の類に於ても彼が特性は燦然としてその餘光を放つてゐる。殊に此の卷末の『よるよるは』夜ふけには』の數章の如き、恐らく『松の葉』以來の名吟であらう。而も彼が各種の詩に於て未だ

見ぬ、單純化の妙味は遂に複雑の複雑に了らぬ彼の今後の詩境を暗示して餘ある。
彼、わが友、木下柰太郎健在なりや。

大正八年十月

相州木兎の家にて

(木下柰太郎氏著食後の歌序)

小田原日記

(その一節)

三月四日。

愛である。ただ深い大きな愛あるのみである。

明日愈家を疊んで小田原へ立たう。病人の妻の爲めにも妹の爲めにもその方がよろしい。眞實に二途は無い。早速決行しよう。自分の爲めにもいい事だ。第一に煩瑣な周囲の情實から

高く超越し得るばかりでもない。要するに眞の孤獨を守らなければ澄み入らぬ。

今思うても葛飾の一年間はよかつた。その時、大自然は私の母であつた。現世の知識慾に燃えて再び田園の中から妻と必死の覺悟をして出て來た時、都會は塵埃と煤烟と喧騒な響音とを以て私達を迎へた。私達は元より如何なる慘苦をも堪へ忍ぶ決意をした。できるだけ簡素に、できるだけ節儉をして、妥協せず、眞の作家としての本分を守るべく二た間か三間の長屋住ひをして貧困に安住するといふ事が、私達夫婦の最初の誓約であつた。無論私達は實行した。それに就ては私は妻に深く感謝する。あらゆる苦しみ堪へて私達二人はこゝまで來た。然し詩人としての私の収入はそれ位の簡素な生活をも支へ得るほどには到らなかつた。詩歌以外の労働(妥協しないで濟む)を敢てしなければ二人の糊口がしのげない故に、詩歌の選その他を棄てるわけにはゆかず。而も、私には切つても切れぬ舊門下がゐる。その爲めに月の半は殆ど何等の報酬をも求めぬ愛と監督との爲めに専心没頭しなければならぬ。かうして讀みたい書籍も買へず、ほんとうの制作をも心安く續くる事すら不可能がちであつた。而も結果は病身な妻をして愈私の藝術の犠牲者たらしめたばかりである。三年計畫の歌集「雀の卵」の編纂すら

殆どこの半年は一指すら染められないのである。考へると金のある人は羨ましい、然しこれでいいのだ。いゝ創作よりいゝ生活を、傑れた詩人としてより傑れた人間として、終始大宇宙の神靈に直面してゆくと云ふ第一の悲願が、幸に窮迫の間にも自分を一徹に、更に深く悲壯にしてくれる。苦しむだけ苦しみ抜くさ。全靈的に生きて行け。

○

全靈的と云へば非常に健康な肉體の賜として、今の自分の官感に愈病的な癡癡から蟬蛻し得たと自信し得る。眞の靈覺は眞に強健なる官感を以てして初めて透徹し得るのである。象徴の眞髓は一にこの靈覺に俟つ。

而も世の神祕が病的な幻惑感にあると思ふは間違である。邪宗門時代の自分を顧ると、自分の靈魂は絶えず自分の不可思議な官能と神經からこづき廻はされ通してあつた。怪美な一種の自己催眠が自分の意志を全然コロホルムの陶酔に陥らせたのだ。そこに恰も豹の生皮をかぶつた裸身の交歡状態があつた。でなければヒンヅウ人の樂の音に踊り狂ふ毒蛇の紅と青との腹側であつた。後悔は爲ないが深く恥ぢるところがある。靈魂の目醒め！ ああ、私の麻睡が極

端に徹した時、私の兩手に鐵錠の響が幽かに鳴つた。三崎での一年間は又蒼天と蒼海とが私を自由にし私を擁護してくれた。そればかりで無い、絶海の孤島小笠原の半ヶ年は私を愈眞純な嬰兒の心に還らしめ、のろのろの正覺坊と信天翁とは私をして愈大愚の道づれにし、叡智の慈悲光を又私の瞳に植ゑつけた。葛飾のたつた一羽の雀でさへ畏くもその雀に私自身の全體を觀せてくれ、透覺さしてくれた。その難有さは私をして思はず雀に掌を合はさした。

永い間の苦しみであつた。私は愈健康になり愈雋銳になる。今は物體の裏面をさへ眞の鋭い靈覺を以て透視し得る程の三昧境に潜入するばかりである。なかなかなれまいが、さうならなければならぬのである。

自分が此二三年間全然長い詩作を廢して、一圖に三十一字に徹して行つた事は徒爾では無かつた。その短小詩形の中に絶えず苦しみ、絶えず磨き、又絶えず澄心しきつた一事が、私の靈魂をして愈淨化し澄徹さしてくれたのである。私は愈謙讓になり愈玲瓏たらねばならぬ。藝道の妙は一種の氣合の體得にまで到達する。が、單に氣合に留る丈では至妙とは云へない。氣合あつて氣合なし。ゆつたりとした、大自然との融合、そこまで行かなければ嘘である。

トルストイより親鸞、日蓮より法然、北齋より芭蕉、西行より良寛である。

○
愛である。たゞ深い大きな愛のみである。

木馬集序

春の小雨のこまかにふりそそぐが如く、愛はあらゆる幽かな無生のものにもふりそそぐ。雨は枯れ枯れの茅萱をうるほし、まだ目に立たぬ草の芽の緑を萌え立たせ、疲れ果てた花園の隅の古びた木馬をも揺り動かす。これを哀れと知つてこそ、此の無常な人の世が新らしく、佗しい閑寂の中にも初めて溢るる大自然界の光明を観るのである。
×
詩歌はこの愛を本とする。

草を観る心はおのれ自身を観る心である。木を識る心はおのれ自身を識る心である。其の他、天體、山川、禽獸、魚介、ありとあらゆる自然界の現象は皆わが身外にあるやうでゐて、皆おのれの深い身内にある。

ただ眼を瞠きおのれの心を澄ましてこれを観、これを聴き入ること、ただおのれの出で入る息の音を聴くが如くに親しからねばならない。

×
感覺以上、五官以上の靈魂の高い歡びが揺り動いて来る。忝い神秘の境涯がひらけて来る。眞の象徴藝術が生れて来る。

この忝い大自然の前に向つて、かりそめにも肩を張り腕を怒らすものではない。弱い蟲ほど身構へる。卑怯な人ほど怒號する。愛無き者ほどまた愛を説く。

詩は愛を説くものではない。愛そのものの聲であり、色であり、香であり、觸である。詩を思ふ心はおのづからにしてこの大自然の前に掌を合せる心である。歌の言葉はこの心の

揺り動く儘に揺れ動いて形を成す。

風吹かば吹け、雨ふらばふれ、何事もお任せ申して安心してゐるにしくことは無い。おのれと外界とが一つになる事である。ゆつたりとこだわりも無く、有るが儘に有る事である。

木馬は雨に濡れ濡れても、馳けり走り狂ひわめく何一つの命も自由さも無いやうでゐて、その儘雨にうたれ風に吹かれてはゐるが、そのうちには時が来る。時が来るとおのづからにして揺れ動いて、深い内から輝いて来る。

木馬もその時、生きた靈體の一つとなる。

寂しさを知り、悲しさを知り、苦しさを知る心は有り難い。寂しさに堪へ、悲しさに堪へ、苦しさに堪へて、眞に高い靈魂の歡びを歡びとする人は有り難い。その三昧境に心の心で遊び恍惚得る人は取りわけて 忝い。
芭蕉はさうであつた。

X

何の木の花とも知れずにほひかな。

この心である。

ああ、木馬は、圓い木馬はその微妙なにほひのあたりで動く。

雨がこまかに降り續いて、耳の無い、目の無い 鬣も尻尾も無い 禿げちよろけの圓い木馬がしきりに動く。

大正九年五月二十一日

童謠集とんぼの眼玉序

山火事焼けるな、ホウホケキヨ、

可愛い小鹿が焼け死ぬぞ。

これは春の暮、夏のはじめの頃に、夕方かけて、赤い山火事の火の燃える箱根あたりの山を

童謠集とんぼの眼玉序

眺めて、この小田原の町の子供たちが昔歌つた童謡の一つだと申します。

昔の子供たちはかういふ風におのづと自然そのものから教はつて、うれしいにつけ悲しいにつけ、いかにも子供は子供らしく手拍子をたたいて歌つたものでした。

それが、この頃の子供たちになると、小さい時から、あまりに教訓的な、そして不自然極まる大人の心で咏まれた學校唱歌や、郷土的のほひの薄い西洋風の翻譯歌調やに壓へつけられて、本然の日本の子供としての自分たちの謠を自分たちの心からあどけなく歌ひあげるといふ事がいよいよ無くなつて來てゐるやうに思ひます。

今の子供たちはあまりに自分の欲する童謡やその他を、その學校や親達から與へられて居りません。それは今の世の中があまりに物質的功利的であるからでもあります。

私たちの子供の頃は今から考へましても、それはなつかしい情味の深いものでした。あの頃子供であつた私たちがいかほど大人になりましたも、いつまでも忘れないのは、幼い時母親や乳母たちからきいたあの子守唄の節まはしです。

でんでん太鼓に笙の笛のあの「ねんねのお守は何處へ行た。」や、山では木のかす萱のかす、

天へのぼつて星のかすの「坊やのかはいさ限りない。」や、十三七つの「お月さまいくつ」や、十五夜お月さま見て跳ねるのあの「うらさぎ鬼」や、こつちの水は甘いぞ、あつちの水は苦いぞの赤い帽子の螢や、一羽の雀が云ふことにあの「三羽の小さな雀」の謠や、思ひ出せば数かぎりもありません。

あの野山の木萱のそよぎからおのづと湧いて出たと云ふ民謡や、かうした純日本の童謡やが、次第に廢れてゆく心細さはありません、私は一方にさうしたいつまでも新らしい、而かも日本人としての純粹な郷土的民謡を復興したいと云ふ考を持つてゐますにつれて、おなじやうにかうした童謡をも今の無味乾燥な唱歌風のものから元の昔に還さなければならぬと思つてゐます。さうしてその本然の心を失はないで、さらに新らしい今の日本の童謡をもその上に築き上げなければならぬと願つてゐます。

私がかういふ心から童謡に興味を持ち出したのも随分と古い事でした。おそらく今の詩人たちの中でも私がいちばん古くから手をつけたのでないかと思ひます。それに私の曾つて公にしました抒情小曲集の「思ひ出」あたりにも随分と童謡味の勝つたものが載せられてあります。

この集の中でも「曼珠沙華」の一篇はその「思ひ出」の中から抜いたのでした。外にもいろいろありますが、幾分子供たちに讀ませるには大人びすぎるので差控へました。

「南京さん」「屋根の風見」の二篇も七八年前に作つたのです。その外は皆新しいのです。

昨年(きねん)から丁度(ちやうど)よく、お友(とも)だちの鈴木(すずき)三重(みへ)吉(きち)さんが、子供(こども)たちのためにあの藝術(げいぎゆ)味の深い、純麗(じゆんれい)な雑誌(ざっし)「赤(あか)い鳥(とり)」を發行(はつこう)される事(こと)になりましたので私もその雑誌(ざっし)で童話(どうわ)の方(はう)を受持(うけもち)つ事(こと)になつて、それでいよいよかねての本願(ほんがん)に向つて私も進(すす)んでゆけるいい機会(きかい)を得(え)ました。

これらの童話(どうわ)はおほかたその「赤(あか)い鳥(とり)」で公(こう)にされたものですが、今度(こんど)改めて今(いま)までの分(ぶん)を一(ひと)まとめにして出版(しゅつぱん)する事(こと)になりました。これを第一(だいいち)輯(しゆ)として、これからも次(つぎ)次(つぎ)に刊行(かんこう)するつもりです。それに私(わたし)自身(こころ)のものばかりでなく、いろいろの國々(くに)の童話(どうわ)をも御参考(ごさんこう)のために手(て)をつけて譯(やく)して見(み)たいと考(かん)へて居(ゐ)ります。

私の童話(どうわ)はただ美(うつく)しいとか上品(じやうひん)とかいふばかりを主(おも)にして居(ゐ)りますのではありません。それに多少(たせう)物心(ぶつしん)のついた十三(じゅうさん)四(よ)歳(さい)以上の少年(せうねん)少女(じやうじよ)たちの諍(うた)ひものとしてよりも、それ以下(いかに)の子供(こども)たちに讀(よ)ませるもの、それには素朴(そぼく)な混(ま)り氣(け)のない子供(こども)の感(かん)覚(かく)といふこと、さうした潑刺(せきせき)とした

感(かん)覚(かく)に根(ね)ざしたあるものから、素裸(すはだか)な子供(こども)の心(こころ)を直接(ちやくせつ)にうつ、さうしたものをと心(こころ)がけて居(ゐ)りますのです。

ほんたうの童話(どうわ)は何(なに)よりわかりやすい子供(こども)の言葉(ことば)で、子供(こども)の心(こころ)を歌(うた)ふと同時に、大人(おとな)にとつても意味(いみ)の深いものでなければなりません。然(しか)し乍(は)ら、なまじ子供(こども)の心(こころ)を思想的(しきてき)に養(やしな)はうとすると、却(かえ)つて悪い結果(けつこ)をもたらす事(こと)が多いのです。それであくまでもその感(かん)覚(かく)から子供(こども)になつて、子供(こども)の心(こころ)のままな自由(じゆう)な生活(せいかう)の上に還(かへ)つて、自然(しぜん)を見(み)、人事(じんじ)を觀(かん)なければなりません。子供(こども)の感(かん)覚(かく)が、どんなに鋭(えい)く、あ(あ)ら(あ)しいか、生(い)きてゐるか(と云(い)ふ事(こと)について、一例(いちれい)をあげますと、子供(こども)はあの陰鬱(いんうつ)な灰色(はいいろ)の空(そら)から、初(は)めて鮮(あざ)やかな白(しろ)い雪(ゆき)の粉(こな)がチラチラと降(ふ)り出(だ)しでもして來(き)ますと、それは喜(よろこ)び勇(いそ)んで、小躍(こをど)りしながら、か(か)う歌(うた)ひます。

雪(ゆき)がふるはな、

空(そら)に蟲(むし)が湧(わ)くはな、

扇(あふせ)腰(こし)にさいて、

きりりつと舞(ま)ひましょ。

童話集(どうわしゆ)とんぼの眼玉(めだま)序(しゆ)

これを大人に咏ませると、「雪は鵝毛に似て飛んで散亂し。」と歌ひます。子供は空に湧く白い粉雪の一片一片を今生れたばかりの活きた羽蟲の一匹一匹として喜び、大人は死んだ鵝鳥のそのむしり散らした羽毛の一片一片に譬へて觀賞します。子供の感覺は生きて動き、大人の感覺はその智慧から先づ盲にされて死んで了つてゐます。大した違ひではあるまいかと思ひます。子供に還ることです。子供に還らなければ、何一つこの忝い大自然のいのちの流をほんたうにわかる筈はありません。

「子供は大人の父だ、」と申す事も、この心をまさしく云つたものに外なりません。私たちはいつも子供に還りたい還りたいと思ひながらも、なかなか子供になれないので残念です。

私の童謡に少しでもまだ大人くさいところがあれば、それは私がまだほんたうの子供の心に還つてゐないのです。さう思ふと、子供自身の生活からおのづと言葉になつて歌ひあげねばならぬ筈の童謡を大人の私が代つて作るなどと云ふ事も私には空おそろしいやうな氣がします。然し、私たちから先づ、その子供たちのさうした歌ごころを外へ引き出してあげる事も必要だと思ひます。さういふ心で私は童謡を作つて居りますのです。

私もこれから努めます。だんだんとほんたうの子供の心に還るやうに、ほんたうの童謡をも作れるやうに。

私はいま小田原のとある山の上に木兎の家といふお伽噺の中にあるやうな幼びた小さな家を自分でこしらへて、花を育てたり野菜を栽えたりして住つてゐます。子供たちも随分と遊びに見えます。私はその罪のない子供たちの笑ひ聲の中に交つて、いつも童謡の中の世界で子供らしく遊んでゐます。どなたでもお子さんのある方は御一緒にお遊びにいらして下さるやうに。

大正八年九月

相州小田原木兎の家にて

香 炎 華 序

華嚴經盧舍那佛品に光明歡喜を盡して説く所の、かの莊嚴相を、此の若き詩人矢部が如何に觀じたかといふ、それを思ふと先づ心からの微笑が予の面上に薫つて來る。畢竟是に由つて、そもそもは清淨の慧眼を開き、離垢莊嚴の法界を觀すべきに、此の近代の陶醉者は却て不淨を

嗅ぎ、魔薫に酔ひ、妖氣に噓び、あまつさへ馥郁たる女體の香炎をさへ感じ、我から香魔の囚となつて、まさに微妙恍惚の體に居る。羨むべき不淨、思議すべからざる邪宗の情癡かなと嘆ぜられる。

凡てが爛熟し腐蝕しかけた文化の中に此の詩人が牛を享けねばならなかつた事から基因してゐる。今や彼はまた飛行機、電車、汽車、自動車、馬車、人力車の馳せ違ふ東都銀座の繁華境にあつて、あらゆる美容麗色の化粧香の中に身を埋めてゐる。細説すれば彼は或る化粧品店の意匠一切を預つて、その耀やかなしい飾り窓の中で、彼の所謂香炎華の新世界をば盛んに創造しつつあるのである。のみならず、その店の主人公もまた彼に劣らぬ芬香の魔術師であつて、あらゆる寶香に觸れ、香階を和し、香度を量つてウレジャ、パンジー、ローズ、リリー等の普薫は云はずもがな、更に甘草薄荷紫の桐の花のそれらに於ける、説くべからず捉ふべからざる香料の種々相をも、絶えず彼の傍にあつて伴奏し創作しつつある。かういふ彼の生活からかういふ彼の詩篇が纏綿として生れ出るのも當然である。

彼は物の形態を見ずして、その現形より燃えあがる形なき背光を觀、將た香雨、香輪、香雲、香電の類に魅了され蠱惑される。また此の詩人の常に觀る色よりして云ふも、それは決して靜止した一つの現色ではないのである。複雑限りなき、而も絶えず流れてやまぬ色の推移であり、動搖であり、變化光であるのである。彼のまた常に觀る線よりするも、香のごとく煙のごとく波のごとく、蛇のごとく、倏ちに現じて倏ちに滅する雷電光のごとき直線ならぬ彎曲線の醉倒であり、疲勞であり、哀傷であり、狂歡ならぬは無いのである。

彼の觀る世相、若くば女相、自が内界の極秘相を通じて、そこには人間の風貌を描く青い煙があり、幽靈があり、未來派の畫のごとく但しは萬華鏡の彩色麥稈圖のごとくその手伎がちりぢりばらばらに離れてゆくとりとめもない恐ろしい世界がある。時とすると比喩的的の蛙になつて跛の人間がびよこついたり、粗雑な海綿製の、そして膨れたり、アルカリ酸の反應を見せたりする腦髓の所持者が薊や寶石やを踏み散らしたり、愛人の赤い舌覺を持つた南風が吹いたり、香ばかりで影も形もない御馳走の皿が明煌々たる食卓の上に運ばれたり、葡萄の乳房が

垂れ、銀緑の噴水がしぶき白いベンチが小意氣に曲つてゐる夢幻のごとき女體の庭園が幻像さ
れたりする。

一種異様の動物性の香氣までが濛々として烟つてゐるかと思ふと、時としてはまた、その香
界の中に神聖なる靈體のXが雪片のやうに白く白く羽ばたき乍ら昇天する。

まさしく頽唐した近代詩人の特質が彼の肉身にも神經的の痙攣香を薫らしてゐる。また少く
とも彼が持つ香煙の中には眼が、人間の眼が潜んで光る。

彼は一面聰明で、伶俐で、理智的である。即ち彼が自己の蒼白い分身を彼より突き離れた
時、彼の取り残された盲目の肉身に倏ち眼が開いて、その眼で凝つと、その分身の癡態を諦視
し冷笑するだけの餘裕も持つてゐるのである。

稍ともするとまた、彼の單純でない趣味上の遊戲心が、不思議に彼の藝術をして光輝あらし
めると共に、またその災禍たらしめる事にもなる。彼は彼の愛人の顔面に推移するスペクトル

の分光線を享樂したり、物理學者のごとき精密さを以て、相互に科學的の表情戰爭を研覈した
り、ふわふわの人魂を白晝の街空に飛ばす前に先づ、鋭角尖塔黄金截斷等の建築圖案を意匠し
たりするのみならず、來るべき精神感應を豫覺しつつ、少くとも作爲された道程に於て巧妙な
る俳優のごとく動作しない事も無いではない。

兎に角此の詩人が現代の我が詩壇に於ても一つの異香たる事は否み得ぬ事實であり、予と同
じ血、同じ肉、同じ脈搏を持つた深切な予が一分身である事を思ふと、今更無量の感慨にうた
れずにはゐられないのである。

香煙の中に眼あり。

彼が詩に對する予が讚辭はこの一語に盡きる。

その耳、その鼻、その眉、その口、その胸、その四肢、それらの朦朧乎とした形ありて形な
く、色ありて色なく、薫のみ彌が上に立ち迷ふ彼が化幻像に惑はされて、その香煙中の眼光に
一閃見悚められぬ人は幸である。

眼、眼、冷たい眼、而も好奇に輝く眼。
光、光、光………

大正八年晩秋

(矢部季氏著香炎華序)

よぼよぼ巡禮

(藝術論抜粹)

眞のいい藝術と云ふものは決してあの馬鹿騒ぎの中から生れて来るものではない。さうして眞のいい藝術と云ふものは、静かなつつましやかな溫和しい感激の底から、恰度溪間の岩清水のやうにこんこんと穩かに湧き出して来るもので、それにこそ本當の清冽さも澄徹さもあり、眞の信仰も安心もある。眞の大勇と云ふものもさういふおとなしい安心の底に根を据ゑてこそ初めて溢れて湧く。眞の沈黙は金砂のやうにその水の底に光つてゐる。愛憐の心もその底から本當に金砂を徹してにじみ出して来る。あの粗暴な我武者な言説若くは行爲の上からいく

ら人道を叫び愛を叫び、巧みに時機に投じて群衆の喝采を博し得たところでその實さういふもの位孱弱で、憶病で、偽善で、不正直で、不純で蕪雜なものはあるまい。またあれ位利己的な偽愛もあるまい。それは氣まぐれにひよつとかすると大洪水をも起すだらう。そしてその洪水の流れが、どうかすると、一時は眞の本流のやうにも見えるだらう。然し時が来れば、その本流と見えた流れのあとにはただ亂脈なごろた石や木片や塵埃ばかりが残つて、その跡からはまた元の通りに森閑として岩清水のみがこんこんと岩を傳ひ、草を濕してゆくものだ。何にしても現代式に圖々しくて、世間師で、附け焼双で、ジャアナリズムの幫間で、見え透いた阿諛や、酒間の交際でもうまくやるとか、駆け出しの若い身空に耻かしくもなく妥協批評や相互賞讃や人氣取りの芝居でも立派にうてる丈の度胸さへあれば大概の小才子は作家だの詩人だののさばつて歩く今の時世である。さうかと思へば眞に實力があり相當の蘊蓄もある人で、ただ氣が弱く心が綺麗すぎ、さうした世間的な交遊も無いばかりで随分と埋れ木になつてゆく人もある。だから今の文壇詩壇と云ふものは随分不公平で、玉石混淆と云つたらこれ位甚だしい現在はあるまい。それに高材逸足の眞の鑒賞眼を持つた眞の意味での理想的の文藝批評家が一

よぼよぼ願禮

人でもゐて呉れたらと思ふが、それさへ今では覺えない。然し、時は自然に陶汰して呉れる。矢つ張何と云つてもいいものしか残らない。それを思ふと安心していい。最後の勝利は眞にいい素質を持ち、眞にいい表現を持ち、眞に度ましくおとなしやかに、何事をも堪へ忍ぶ眞のいい藝術家の手に歸する。で無ければ何が藝術であらう、何が藝術の徳、美、眞、善、妙と云へるであらう。何が天才であらう。何がまた名人であらう。

また、輕薄で冷酷極まる世間の人氣といふものが果してどれ丈の正鵠をうがち、またどれ丈の信賴をも贏ち得るものか、權花一朝の榮と云ふけれど、今の流行作家の地位ぐらゐる危険至極のものはあるまい。私なぞはさういふ人氣に乗せられて随分と有頂天になつたものだが、その有頂天の一瞬には既に大墜落の禍機が同時に胎むでゐた事を後から氣がついた時はもう既に遅かつた、だからああいふ有頂天になつた人たちを見ると、私はもうハラハラする。私はもう詩では墓標を立てられた人間だから。(島國根性と笑つちやいけない、このケチくさい日本では詩人は三十小説家は四十の坂を越えたが最後倏ち墓標を用意せられるものだといふ事は覺悟してかからなければならぬ。それはコツコツと丹念に鍛ひあげ苦勞し抜いて來た先進たちがさう

であるから、生若い一夜漬の流行作家などはせいぜい一二年の壽命だと思つた方がいい。殊に此頃のやうに、本氣の苦勞もする事か、何が何でも一足飛びに、一時でも早く世間に出ればいいといふ風潮ではね、一にも金二にも金で、一時の榮華さへ得ればいいのだから、さういふ輕薄な功名がいつまで永續するものか。私ももう安心して氣永にゆつくりと、我を張らず名聞心も去り、これからは愈詩人として人間としての其の自分を省察し、眞に自分から少しづつでも此の汚れ腐つた自分と云ふものを救ひあげなければならぬ。私は私自身を眞に救ひあげさへしたら、その事丈で多少とも人をも世間をも救ふ事ができさうに思はれる。今の私には決して大きい事は云へない。私ぐらゐ自分の醜さ弱さ小ささと云ふものを痛感してゐる人はあるまい。それだからこそ私は恥ぢてばかりゐる。苦しんでばかりゐる。祈りの心で自分と自分で洗ひ淨めてばかりゐる。どうして今の私が見え透きたいい加減な賞讃やお上手に乗つて有頂天になり得やうか。どうしてまた今の私に世間の蔭口や冷嘲や輕侮やなどに對して飛びかかつて憤つたり、慌てて酒間の八百長を敢てしたり、弱氣を出して悄れ返つたりする氣になり得やうか。私はコツコツやつて行かう、地味に執念強く、どう考へても三日天下の流行作家にはなりたく

ないものだ。私はかうやつて地道に歩いて行つて、四十位になつたら本當の詩と云ふものが一つや二つはできさうにも思はれる。五十にもなつたら多少の世相もわかつて、どへにか小説らしい小説も書けさうに思はれる。辛抱する事だ。苦業しぬく事だ。さうしてせいぜい長生をする事だ。何事によらず最後の眼を瞑る時までは一生涯だと思はなければならぬ。現世は修業だ。ただ生きてゐる限りは自分の靈を少しづつでも高めて行つて、本當に眼を瞑つた時の一瞬に本當に自分の靈をして高く飛揚させる丈の修業をして行かうと思ふ。地上からたつた二三間ばかりしか羽ばたき上れぬ鶏と、高山の巔から颯爽と飛翔する隼の高度とはどれだけ違ふかを考へなければならぬ。

人間、人間と云ふ此の言葉くらゐ甘へもの人間に取つて融通のきく簡易な自家辯護の武器はあるまい。然し人間だからこそ、悪を除き、醜を去り、少しづつでも、たとへ一歩づつでも宇宙の神靈へ通ずる眞實の正しい一路を歩まねば眞に許されぬものではないからか。それを思ふと私は身の毛のよだつやうに慄然する。よくのめめと私のやうな醜惡な人間が天日の下に安閑と生きてゐられるものだ。私は必死に私の中の悪と醜とを削り出さなければならぬ。

もつと私はそれらを凝視しなければならぬ。もつと私は私と戦はなければならぬ。もつと私は私を苛酷に、血まみれに取扱はなければいけない。それでなければ私にとて救はれさうにも無いのだ。私は今さういふ身垢と汚辱とにまみれ盡してゐる。この私をどうしたらいいのか、所謂社會の改造も急務かも知れない。然し私は私の靈魂の淨掃を先づ敢て爲なければ、高が私たちのこの小さな家庭をすらまだ白い蓮華のやうに清淨化し得てゐないではないか。人を救ふどころでは無い。

それに詩に就ても私は随分永い間苦しむで来た。

それは貴女もよく知つてゐる。ああ、私は決して天才では無からう、さういふ自分を天才視するほどの驕慢も自尊も今の私にはさらさら無くなつた了うた。全く身の程を思ふと恐ろしくなる。が、何と云つても私は詩を離れて生きてゆけない人間だ。端くれでも矢つ張り私は藝術家の一人だ。藝術家の藝術に奉仕する苦しみと云ふものはまた格別なものだと云ふ位は知つてゐる。あの葛飾にゐた頃にしろ、私は字を削り句を削り、一念に彫心鏤刻の極を盡した、が、了ひには、思ひつめた「白金の唾」のやうになつてたゞ燦々とした涙ばかりが頬を傳うた。何

にも云へなくなつて、たゞ、うむとかおむとか云へばそれでよかりさうにも私は思へた。然しそれきりになつては詩が無くなる。そこから切端つまつて溢れ出したので詩になる。詩は詩の形で表現されなければ詩とは云へない、結局は表現せなければならぬのだ。その表現にしてか
 らが、無論最上最的確のもので無ければならぬのだ。表現などはどうでもいいと云ふ人があ
 るが、それはあまりに詩の徳詩の妙といふものを知らない人の言葉である。一枚の木の葉が
 くにその一生を以てした貧しい畫家もあつた。たゞ一點をうつつ爲めに十年の酸苦を嘗めた大愚
 な畫家もあつた。そこまで行かなければ眞の藝術とは云へない。眞の天才眞の名人とは云へな
 いではなからうか。詩の徳といふものはそれほど貴くてそれほど靈驗なものだ。それを僅か
 でも私が知つてゐるからこそ苦しむのだ。愛の藝術と云ふものは決して愛そのものの概念を雜
 雜に演述したもので無くて愛そのものを藝術として眞に體現したものに外ならぬ。空力みで
 は何にもならないだ。

つくづく慕はしいのは芭蕉である。光悦である。北齋である。利休である。遠州である。ま
 た武藝神宮本立心である。私もどうかしてあそこまで行きたい。風流が風流に了らず、眞に自

然に還つて、一木一草の有るが儘におのれをその中に置く、さうした自然に任せた、あなたま
 かせの境地こそ眞の藝術では無からうか、私はその心を以て心としつつある。さうなりつつ
 ある。

私の此の超脱的閑居の精神もそこにある。人から見れば極めて弱氣な消極的なものにも見え
 やう。然し私に取つてはこれ以上の積極的生活は無。見てゐてくれ、どちらが眞に光つて來
 るか。

私がかうした生活は少くとも此の現代と逆行して見える。然し、現代に生きてゐる限り私は
 現代の人間に違ひない。少も逆行は爲てゐない。あらゆる現代の薫染は受けるがその爲めに胡
 麻化されはしない。殊に思想的推移の狂激な現代に於ては、ともすると不時の旋風に捲かれた
 蜻蛉のやうに眼玉をクルクル轉廻した末は何一つその思想の本體さへ掴め得ない人が少くな
 り。とすると、稍離れて徐に靜觀してゐるに如くは無。さうして心を不易に通はしてゐる
 に如くは無。時代思想は倏ち變轉する。流行は一時に過ぎない。あの奢侈と淫佚とを極めた
 元祿の思想は赤穂義士の討入に依つて、倏ち敵討の一大颯風を捲き起して了つた。然し今はど

うであらう。奢侈も敵討も俱に煙散霧消して、その跡にはただ一代の俳聖芭蕉のみが燦然として
て曉天の金星のごとく、残つてゐるでは無いか。

兎に角芭蕉が入寂してから可なりな時代が私達との間を隔離して了つた。世相も幾變轉して
ゐる。然し芭蕉の生々とした胸の動悸は一足飛びに後代の私の胸をうつ。ここを考へてくれ。
私此の胸の動悸が一足飛びに、また隔絶された後人の胸に或は直通するかもわからぬといふ
事を。高が五年や六年詩を作らぬとて、いや、發表しないとて、直ちに拜み倒したり幽霊視し
たりするケチくさい人達の狭量と輕薄とを憐むでやるがよい。

それからまた、此の頃ではさうした一方に、學實なる一團もあつて、桃青會といふのがある。
聞くところによると、現代の浮華輕躁を嘆いて、かの閑寂の靈芭蕉を尊崇して、何事も私等は
芭蕉主義を以て生活せなければならぬと叫むのである。私にも入れと云つて來たが(いやその前
に、私が知らぬうちにもう會員にして了つてゐたが)由例くさいから黙つてゐる。芭蕉と共鳴
するのはいい、研究するのはいい。然し他の生活方式を以てその儘自分の主義とするのはいけ
ない。私は飽まで三原素春で生きてゆく、主義といふ小さな紫縛を作るのは厭な事であるが、

強ひて主義とするところを求められれば私は飽迄素春主義で生きてゆくと云はふ。

白秋詩集序

詩は藝術の精華である。この詩の道を行ふ外に、私は生れて何一つ與へられてゐなかつた。
これが爲めに、私はただ一寸詩に仕へて來た。詩に生き、詩に瘦せ、詩に苦しみ通して來
た。人間としてのかうがうしい歡びも、人生の果知れぬ寂しさも、私はただ詩に依つてのみ現
す事が、ただ私の取るべき道であつた。
私は歌つた。歌はねばならなくなつて、私はただ歌つた。かうして私の詩が流れ出して來た。
こんこんとして大地の底から湧き上り溢れ出づるもの如く、これらは皆私の心肉から眞實に
溢れて言葉となつたものであつた。とりもなほさず私のものであつた。

私は何も彼も貧しい。忝いこの大自然界の莊嚴相の微塵でもこの凡下の私が知り得よう筈
も無かつた。今にしても何一つ私の知り得たものは無い。その初め私はただ幼子の驚きを驚きと

した。さうして晝も夜も童話の王子のやうに紅と紫金との夢の彼方ばかりを追ひ求めてゐた。續いてはただ不可思議極るあらゆる官能と神經の陶醉から殆ど救はれ難き自己魔睡にまじ、迷眩させられて了つた。近代頹唐の所産たる「邪宗門」が既に是を證する。而も私の生涯に一大轉機を劃した苦しい戀愛事件の後、私は新に鮮に蘇つた。全く新生の黎明光が私の心靈を底の底までも洗ひ浄めてくれた。私は皮を脱いだ緑蛇のごとく奔り、繭を破つた白い蛾の如く羽ばたき廻つた。私は健康で自由で而も飽くまでも赤裸々で、思ひきり弾み反つて躍つた。光りかゞやく法悦、あらゆるものが歡びに満ち満ちて私に見えた。その三崎、小笠原の生活から再び東京へ歸ると、一時はまた一種の狂喜的な靈感から殆ど我を忘れ禮讚唱名の日夜を送つた。その發作が止むと、いつとなく次第に無常の光明を觀じ、その寂光の淨土を思慕する落ちついた靜謐な心に目醒めた。さうしていよいよ一切の實相があるがままに肯け入れると共に己れをまたあるがままにその中に置く、即ち人間はただその本元に還り、ただ自然のままに己れを還す、かうした恭禮三昧の境地に私は私自身を見出して來た。

畢竟するに、眞の高い詩は愛あり慈悲ある心からこそ生れてくるのだ。さうして靜かなおと

なしやかな眞の感激の底から眞の良き詩は溢れて來るのだ。何事にも深く頭を垂れ、いよいよ深く遡るべきであつた。私はここまで漸く到達したように思へる。眞の詩は執し盡して終に詩を忘れ果てた刹那に初めて縹緲たる聲を放ち、眞の愛は執し盡して終に我を忘れ果てた、その没我の境地に到つて初めて光り耀くものだ。この没我の微妙境の中に眞に恍惚として掌を合せるものは幸である。

然し、ただ私は耻づる。

かうして、これまで私の創つて來た詩の凡ては凡てが今日の私を生む苦しい準備の層積であつた。顧ると感慨交々臻る。

私が詩を創り初めたのは十五六歳の頃、さうだ、まだ中學の一二年時代からであつた。それからもう殆ど二十年近くになる。その數量から云つても可なりに夥しい。その詩風から云つてもまた幾變遷してゐるかわからない。本集に輯めた二十歳以後の所作を通じて見ても純情の小曲もあれば斷章もあり、音樂的象徴詩もあれば繪畫風のそれもある。印象詩もあれば景物詩もある。さうして第二期の象徴詩もあれば小唄俗謡の類もあり、短唱もあれば長歌もあり、童謡

もあれば新らしい散文詩體もある。その形式も種々雑多で複雑極めてゐる。殆ど明治の末期から今日に到る現代日本のあらゆる詩體の推移がここに綜覽され得たと見ていい。而も思ひきつて古典的な禮讃體もある。

凡てを通じて、得る所の多かつたのは全く「邪宗門」「思ひ出」「雪と花火」の時代であつた。その以後は次第にその數を減じた。これは一に貧しい實生活の上から阻害され盡したのである。それに一時は短歌の創作に熱注した故もあり。その後また散文の創作に轉じたからである。

本集には既刊の「邪宗門」「思ひ出」「雪と花火」「眞珠抄」「白金の獨樂」「わすれなぐさ」「白秋小唄集」「とほの眼玉」等の諸詩集と、未刊の三崎詩集「畑の祭」、及びその後諸雜誌に載せたまま公刊の機を失つた大正五年來の諸作、それに加ふるに「邪宗門」前の少年期の長篇その他を綜括した。で、殆ど私の詩の凡てを網羅したと云つても差支無い。かうしていよいよこの綜合詩集全二巻を以て、私は昨日の私と潔く別れる。

考へると私の歩るいて來た道は随分華靡でもあつたが、随分の難路でもあつた。この道は今

やいよいよ一足毎に高く、一足毎に雲深く、彌深く閑寂無二のものとなりつつある。

この道や行く人なしに秋の暮

切に芭蕉のこの句が思ひ出される。結局は矢つ張り私一人の道だ。

大正九年八月

小田原木兎の家にて

白 秋 識

南海異聞

小笠原の夏

○
愈々、小笠原の夏が来た。

暑い、暑い、朝つからもう日中だ。今朝などは眼が覺めると、溜らなくなつて飛び起きた。空中が油煙臭くて思はず胸がむかむかする。昨夜、ラムプを消し忘れたのだ。頭がモジヤモジヤするので両手で掻きむしると大きな油蟲が二三匹飛び出した。黒蟻までがポロポロこぼれ落ちる。油蟲にも弱つて了ふが、蟻から頭の毛に群られるくらゐの悪味のものには無い。蟻と云へばある内地の畫家が島の農家に泊つた夜中の事である。シユウシユウといふ音に目が覺めると、小暗い油果の下で、おかみさんが床の上に起き直つて、長い髪の毛を逆さまにしてシユウシユウと櫛で梳いてゐる。驚いて何爲たんですと聲をかけると、いえの、蟻を梳いてますじやあよと答へたといふ話を聞いたが、それは事實である。全く身顛ひがする。

蚊帳をまくると、油蟲の羽音が雨の降るやうだ。バナナの腐つた臭ひや、饅頭た甘蔗黍の汁の臭ひがいつぱいする。

階下へ下りてゆくと、この宿の白髪のお婆さんが籠の下にしやがんでブウブウと火吹竹を吹いてゐる。白い浴衣を朝つから肩肌脱ぎにしてゐる。組板の上では庖丁や甘藍がガタガタ動いてゐるのだ。動かしてゐるのは油蟲の密集團だから凄くなる。

ところが、不思議な事には、この島には蚤や虱は一匹もゐない。蛆はある、それはすばらしいものだ。裁判所の書記のAさんの話に據ると、未だ夜が明けない頃に、天の一方で、電車の曲る時にギイと音を立てるそつくりの音がするさうだ。それは蒼蠅の大圓柱で、魚市場だとか、腐れ盡したバナナ畑とか何でも臭氣の激しい個所を目がけて突進すると云ふのだから驚く。幸に私は朝寝坊で未だ一度も見かけない。

裏の井戸端へ出て、素つ裸になつて釣瓶の水を頭からザアザアかける、それでやつと活き返るのだ。

空をふり仰ぐと、雲一つ無い瑠璃色の圓天井は南洋人の髪飾見たいな椰子の葉の上に怒ろし

いほど澄み亘つてゐる。實に何とも云へぬ美しさだ。椰子の葉のてつぺんはさらさらと揺れてゐる。風は高い高いところを流れてゐるのだ。

檳榔葉葺の家の蕃瓜樹の花、紅い佛草花や、棚の火のやうな碇草の花の群がり、凡てがまるで真空のやうに明るく、而も乾燥しきつてゐる、光り耀いてゐる。

全く小笠原の夏だ。今朝もまた昨夜の食べのこしの正覺坊の煮つけを、婆さんが食べさせるかと思ふとウンザリする。

木戸を開けて外へ出ると、道路の白い砂地は既に黄白く輝き出してゐる。下駄は穿いてゐるものの足の裏が熱くて燻けつくやうだ。

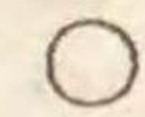
と、見ると、不可思議な魔法國の光景だ。幻覺の世界が私の眼の前に燦爛と、而も靜謐と平和と微笑とを以て輝き出した。

T字形の町角の正面、挽物細工の店の前、其處には大きな護謨の木があつた。その厚い油ぎつた葉は原色の青だ。その新芽は犬の陰莖の如くまたは朱の蠟燭のやうだ。その下で、女が立つてゐる。手には荒縄でくくりあげた正覺坊の頭をブラブラさしながら白い麻の帽子を阿彌陀に

かぶつた白人の漁師と、何やら話してゐる。呑氣な話だと見えて、笑顔までしながら、何が何でもおじやるじやあと、のろくさした古雅な八丈言葉で話してゐる。白人の奴は下向加減に大きなマドロスパイプを啣へて、煙をまよもよさしてゐる。

ブラブラの正覺坊の頭の綺麗さはまた格別だ。青、黄、緑、瑠璃、翡翠、寧ろ毒々しいほど鮮かである。

鶯が啼く。鶯が啼く。



千年に一度しか咲かないと云ふすばらしい蘇鐵の花が咲いたと云ふ、山から見つけ出して切つて來たと云ふ。見に行つて御覽なさいと人が云ふので、日中だつたが、つい近所なので見に行つた。

恰度、Mといふ雜貨店の向ふの家で、平常はあまり見すばらしいので、何を爲る家かとも気がつかずに通り過ぎた檳榔葉葺の陰氣な平家だが、今日は何だか家の中が光り耀くばかりに明るう。

板張りの座敷に（此島には墨を敷いた家は官舎の外には一軒も無い、宿屋でも板張の床の儘である。偶には其上に葎だけ敷いてある。壁なども内地のやうに土では無い。板か檳榔葉かである。）大きな大きな恐ろしく大きな蘇鐵の花が、之もまた驚く程大きな素焼の鉢に、まるで神様の様に祭られてあつた。

花ばかりだと云ふが、高さが一間の餘もある。鳳梨を何百と積み重ねたやうな茶褐色の花だ。それを黒ん坊の婆や眞黄色の日本の娘や白人の漁師共が掌を合はせるやうにして蹲踞んで覗き込んでゐる。肩と肩とをすり合して、眼を皿のやうにしてゐる。

よく見ると、まるで生物だ。生不動のやうに燃え上つてゐる。香氣と云つたら悶絶しさうだ。むしろ苦しいくらゐの芳香である。

それに、蕭々として黒蟻の幾千萬が密集して匍ひ上つてゐる。

蘇鐵の花にも驚いたが、凄まじい黒蟻の密集團體には全く身體がガタガタ顫へるほど驚いた。

○
黒人のアレキサンダア・イサベラ婆と云ふ名ばかり西班牙の女王らしい婆がある。その婆

のお喋舌ときたら、天井のお星様よりお喋舌だ。この暑熱にこのお婆さんにつかまつたが最後、誰でも死ぬほどの苦患を嘗めなければならぬ。

それにもう一人、ママの海岸といふところに、今は癩病の西班牙の老貴族の婆さんの僕で、昔は人を食つたと云ふ黒人のコペイ爺の娘にアギネスと云ふのがゐる。この娘のお尻の大きさときたら二擁へもある。このアギネスがある時獨木舟に乗つて、あの大きな飯杓子のやうな櫂でガボツガボツと漕いでゐると、何でも大きな岩礁にドシンとぶつかつた、その拍子に、驚いた事にはお尻の力で舟が二つに裂けて了つたといふ話だ。（尤も小笠原の獨木舟は底だけ割つてあつて、兩側は板張である。）このお尻ではこの暑熱には全く溜るまい。

○
小笠原の夏は全く此の二人で象徴してゐると云つても差支へない。

ただでさへ光澤の強い色々の樹の葉が、夏になつて愈々油ぎつて來た。檳榔の葉などはてらしてゐる。それに護謨やモモタマヤの豊麗で、部厚で肉太な樹の葉の色深さつたらないのだ。

七月になつて、又島中のタマナの白い細花が咲き盛つた。香水の原料になる花だと云ふが、全くその花の満開する頃には島中が香水の島になつて了ふ。

山上の枯草にしろ、両手で揉みにじると、掌が香水に涵したやうになる。西洋にも枯草と云ふ名の香水があるさうであるが、恐らくかうした草の匂ひがするであらう。

夏は、殊に、日中は對岸の山の向うから湧き出づる入道雲がまるで金色になる。莊嚴な佛畫に見るやうな金色の雲だ。

光線の鋭さと云つたら無い。道路の白い砂(それは人間の脊髄骨のやうな砂ばかりだが)も、椰子や護謨の樹の幹も全く金色に反射する。

裸の人間の身體もだ。

今日は〇灘の濱邊へ行つて見た。

海の色の麗らかさ、それは何とも云へぬ澄み亘つた瑠璃色だ。濃厚で豊麗で光輝に満ちてゐる。

裸の子供どもが二三人泳いでゐたが、その肉體が鮮やかな紅色になつて見える。こんなに美しい人間の肉體を見た事は無い。

その子供どもが海から上ると、正覺坊の生洲に飛び込んだ、引汐時なので、十幾頭の大きな正覺坊は甲羅も何も干からびたなりだ。のろろして重なつたり、離れたり、眼をほそくしたり、首を延ばしたり、匍ひ廻つたりしてゐる。その甲羅の上を子供どもが、ちんちんもがをしたり、飛んだり、走つたりする。まるで飛石見たいに思つてゐる。

正覺坊こそ災難だと思ふ、それでも呑氣なものだ。相變らず恍惚微妙の體をしてゐる。殊に交尾して重なつた奴は、その下の雌は流石に苦しいだらうと思ふ。それでも重なつた儘だ。

この砂濱からメリケン松や龍舌蘭の防風林を抜けると、人間の背丈ほどの萬年青が路傍に並木をしてゐる。それに四五尺の莖が一本づゝ出てゐて、大きな花魁のかんざしのやうな白い花が、盛りは過ぎたが、まだ咲いてゐた。蟻がやはり根本から上り續けてゐるのは驚く。

前の女郎屋の井戸端には、浴衣がけの怪しい女どもが何かべちやくちや喋舌くりながら、だらしない風をして、洗濯したり、齒を磨いたりしてゐる。もう彼はお午なのに。随分寢坊もある。

つたものだ。

隣の罐詰工場では、大釜に正覺坊を煮つめる臭ひがぐらぐらしてゐる。黒人のデヨウヂ・ワシントンといふ名ばかりの大統領が相變らず、杓子で大釜の中を掻き廻してゐることだらう。

此頃、何處へ遊びに行つても、赤いトマトばかり出す。小笠原のトマトは全く新鮮で、鶏肉のやうな味だ。

トマトと云へば、私はある時、とある人の氣もない山坂を登つて行くうちに、急に折れ曲ると、向うから赤いトマトを竹の籠に山盛りにして、それを両手で擁へて、よちよち上つて來る六つばかりの子供にパツタリと行き當つた事があつた。

その子供の神々しさ、まるで頭から御光がさすかと思つた。思はず掌を合せたが、あれこそ佛の童子といふのだらう。

それほど天上の光が強くと、トマトが燃え上つてゐたのだ。

○

正午。——下の座敷で、晝餐を一人でポツリポツリと食べながら、何氣なく、板塀の上の空を見てゐた。

何が私の眼に這入つたか。

其處には檳榔葉葺の向ふの家根だけが見えた。その上にてらてら光つてそよりもせぬ護謨の喬木が見え、肉太の大きな妻の無数が、寂寞たる白日光耀の中に葉と葉、枝と枝とを垂れかぶさしてゐるだけだつた。その間から、梢の上から空が見えた。麗らかな瑠璃色の夏の空が。

と、ピカピカと光つたものがある。それが光つては上り、光つては下りする、とまた葉に留つては急に落ちかけたり、空へ飛んで行つたりする。それは翡翠玉のやうな一點光である。

表の通りは聞寂として物音一つしなかつた。

ふと、しくしくと獻敬する聲がした。

驚いて、立つて、庭の木戸を開けて見廻はすと燉けるやうな白い道路の真ん中に金髪の眼の碧い色の白い、まるで護謨人形のやうにくりくりして可哀い小さな白人の子供が、涼しい白いシャツを着けて、裸足のままで、両手を眼に當てゝゐた。泣きじやくりしてゐるのである。

『どうした、どうした、』と云ふと、急に聲を高め乍ら、'Want' と泣く。『泣くな、泣くな、何が欲しいんだ』と、頭を撫でると、

'I want Dai-fuku-mochi,' と云ふ。

見ると、眼に當てた両手の一方の小指に細い糸がついて、その糸が真直に天上さして登つてゐる、それが些のたるみも無く緊張する丈緊張してゐるので驚いて、眼を空へあげてゆくと、これで解つた、その糸の尖端に青い玉蟲がゐるのである。

子供が泣いたんびに両手を眼から上げ下げする。そのたんびに糸を引つ張り下ろされ、落ちかかる、また飛んで行つては護謨の葉へ縋りつくのである。そのピカピカだ。

おお、玉蟲と子供と大福餅。

風流だか、商賣だか、天然老人の物數奇には驚く。註をして置くが此老人は名古屋の商人で、綺麗な人相の人だ。とある小さな家の戸口に天然物買占所といふ看板をかけて、自分はその内で、せつせと、白壇の根つ株やモモタマやタマナの木の瘤やを磨いてゐる。天然天然が口癖なの

で、私達は天然老人とお呼びしてゐる。

天然老人、ある日の事に奇體な男根そつくりの木の瘤を發見した。非常に悦に入つて、鬱金の布で拭いたり磨いたり掌中の珠のやうに慈しんだものだ。私が行つたら、顔を赤めながら、そつと懐中から出しては引つ込める。それ文なら何の事も無いが、瓏を得て蜀を望むで、又一つ欲しくなつた。それから毎日折り疊みになつた小さな鋸を澁色の雜囊に入れて、肩から斜めに掛け流しては隨所の山野を探してある。一つだからこそ尊いのです、二つとお探なさるなど忠告しても、いや人には見せないものでござすで大丈夫でござすと云つては出てある。時々は獨木舟は一人で漕げさうにもありませんで、御助勢頼み入るでござすと頼みに來るので仕方なしにお伴をする。そのうちに幾度となく木に上つては鋸をゴシゴシやつたのが戸棚に一杯になつた。もうよかりさうなものだと思ふと、今度は陰木を一つと仰有る。ほとほとに驚いてお伴をして行く中に、とある日のこと、變然老人の庵の前を通り懸つた。又託をして置くが、此老人が又變物で、寒山拾得そのけの風體を爲てゐる、髪ももじやもじや衣物もボロボロで、眼鏡だけは大きい、眞黒い出つ齒のそれはそれは乞食見たいな爺さ

ん、大神宮の鳥居の前のバナ、林のなかに住んでござる。家の中はと云へば虱の湧きさうな汚れ腐つた緞子の蒲團を一枚敷きつばなしで、周圍には珊瑚のかけらや高瀬貝や廣重の版畫や、そこらいつばいに取り散らして、御自分は破れ鍋で蕎麥粉を掻き廻はして、瓢々と煙の行衛を見惚れてゐるといふ、あまりに變妙なので、天然老人に對して、變然老人の尊號を奉つたのである、此二老人面白い事にはお互に輕蔑し合つて、あれは何でござる、高が乞食でござせんかと一方が云へば、一方は又、ははん、あの俗物がと云つた風である。

ところで、その庵の前を通りかかると、變然老人その日は草鞋に脚絆がけで、白檀の杖（騎いてはいけない、小笠原では白檀は山間の堀立小屋の柱にも使つてある。）をついて何處へか御出ましの様子である。天然老人ニヤリと笑ひながら、天然木探險はいかがでござると云へば、變然老人、いや拙者はな、何とか山の獨活の大木を見にまゐるのでと空を向く。獨活の大木、へへへと笑ふと、いやそのな、全くの獨活の大木でな、その周圍が三擁半のな、高さが五六丈がものあるさうぢや、ぢたいが此島に二本有つたといふ話じやが其一つは惜しいかな、枯れ申したで、今は唯だ一本きりじやと申す。それがな、例の大木で、それ杖でかうと云つて、横撲り

に拂ふ様を見せて、これでボキリと折れるさうじやわ、笑止じやないか、フアフアと黒い出つ齒でお笑ひになる。

天然老人澄ましたもので、いや拙者は天然の陰木さがしでござる、御免蒙る、北原さん、さあ参りませうと私の方を一寸顎でしゃくつて見せた。

私は獨活の大木に氣がひかされたが、山は流石に弱るので、海の獨木舟を漕ぐ事にした。夏はいよいよ酬である。

小笠原島夜話

一

島の自然觀、乃至はその住民の狀態に就いて、何か話せとお仰るのですが、それなら差當り小笠原島のお話でもさしていただきませうか。

『聞いて極樂、見て地獄』と申しますが、決してああいふ離れ島などに内地の人が、永く住め

るものではありません。

小笠原島も元は随分の極楽島だつたと、生き残りの黒人の爺などが、ある晩深い溜息を吐いて私に話して呉れましたが、それは或はさうだつたかも知れません。その頃あの島々もまた童のやうな牛れた儘の島で、そこには紅い崖や緑青色の岩壁や、高い椰子や、林投樹や、モモタマの木の籤などが、澄み徹つた瑠璃色の空と海水とに、強烈な亞熱帯の色彩を耀やかしてゐる外には、あの、圖抜けて阿呆らしい信天翁や四時婉轉として驚や瑠璃鳥が啼き慌れてゐるばかりで、毒蟲一つゐず、太陽は大きく耀やかしく、月も大きく朗らかであり、星も大きく光芒を曳いて、晝も夜もただ燦爛とした自然相を織り續けてゐたのでした。

たまたま、天明五年に土州の船頭四人、同じく八年に肥前船の十一人、寛政元年に日向志布志浦の船頭榮右衛門とその船子の四人都合十七人が同じ一つの無人島に漂流して、永いのは十二年、短かくて七八年、辛さに漂人としての辛苦艱難を共にする内に、その中の幾人かは病死し、やつと残りの人数だけで、覺束ない小舟を造つて、やつとの事で八丈島まで漕ぎついたといふ事もありました。その島は今でいふ鳥島かと思はれますが、ああいふ限りの無い麗光の中に

在つても、人間は決して人間社會を離れて生きてゆけないと云ふ大事が痛切に感じられたに違ひありません。

母島の傳説に據りますと、曾てその島に漂流した内地人の中で、生き残つたはただ船頭とその妻と、若い船子との三人でした。無人島に男が二人と女が一人です。一人の女は自然と二人の妻になつて了ひました。其處は無人島です。人間社會の外です。考へて下さい。その三人にはその時、ただ一つの共同の火を守る事が何より神聖な、また痛切な緊要事でした。船頭とその妻とが洞窟に夜眠る時、若い船子は、一晩中その外に在つて、その火を守らなければなりません。そしてまた、若い船子と自分の妻とが夜眠る時、船頭は、しよぼしよぼと目をしただたきながら、また一晩中、洞窟の外に蹲んで火を守らなければなりません。船頭は老いてゐる。船子は若い。人間は終に人間です。船頭はある深夜、突然激怒と嫉妬に驅られて思はず、自分の守つてゐた薪火を岩壁にたたきつけて了ひました。火が消えて了ひました。その三人の生死の火が。

所謂黒船の提督ペルリが浦賀へ来て、太平の島帝國を脅かして、一旦本國へ歸ると稱して南

へ去つた後、再交渉の爲め北上したその間は、彼は彼の艦隊を小笠原島の父島に停めてゐたのだと云ひます。本國へなどは歸つてゐなかつたらしいのです。彼はその島を開墾し、石炭貯蔵庫を建て、部落を作り、後には整然たる三頭政治を布いたと申傳へます。さういふ風にさやかでも人間同志の社會組織が成立すると、ただ絶海の無人島として、人をして恐れしめ凄まじがらせたその島々にも初めて温かな人間の愛情と心音が燃え立つて來ました。人間もまた、その燦爛とした自然の麗光を初めて、安心して目にし耳にし、觸れ、嗅ぎ、親しみ出した事も、非常に考ふべき事だらうと思ひます。無論、人間がゐなかつた時も、一人二人漂流して來た時も、部落ができ一小社會を形つた後も、その自然の本體には少しの異動があつた筈はありません。そこへゆくと寂しいのは人間です。大勢集まつて、愛と道義と禮節と相互扶助とで寄り合はねば生きてゆけないのです。何ものの麗光をも感知する丈の餘裕も持ちあはせないのです。ペルリの艦隊が去つた後も、残るものは残つたし、それに船から逃げ上つた黒人の奴隷、密獵船員の家族などが相變らず共同的な安樂な生活を續けてゐました。大統領もゐました。無論共和政治です。然しただ部落は小さな一つの部落に過ぎませんでした、それだけ山野の食物は

豊富なり、大して開墾せずともバナナもあれば椰子の實もあり、自然の恩恵は少數の人々にとつては飽足するほど充實してゐました。それに外界との小面倒な交渉は無し、不純な權勢からも壓迫されず、ただ自然と整つて來る秩序と無文律の道義的制裁とが、その社會をおのづから美しいものに育ててゆきました。それで人々もしぜんと珍草寄木を愛翫したり、畑を作つたり、互に遊樂したり、自由に戀慕し合つたりしたらしいのでした。空腹じくなる頃には、工合よくまたペルリの放して置いたのちに、しぜんと繁殖した豚の群集が山を下りては部落の檳榔葺の小屋近くに啼いて來たさうです。それを甘蔗焼酎を飲み合ひ乍ら、厨房から鐵砲で射つたものだと云ひます。正覺坊にしてからが、その頃は随分と灣内に游泳してゐたものださうで、二時間も丸木舟で漕ぎ廻れば、三頭や四頭は無雜作に手捕りにする事ができたし、全くその頃の小笠原島は一種の極樂島だつたに違ひありません。

二

それが明治になつて日本の版圖になると、すつかり根柢から破壊されて了ひました。警察權

と行政權とを一緒に兼ねた王様のやうな島司と云ふ者が来る。サアベルがガチャガチャ鳴る、小面憎い矯慢な小役人がのさばる。こすつからい喰ひつめ者の小商人が入り込む、繁雜な文明の餘弊と、官僚的階級思想が瀾漫する、島の民主的極樂境は一方から云へば殆ど滅茶ム々になつて了りました。それで今まで自由に開墾し得た土地も制限され、あまつさへ花畑も野菜畑も取り上げられ、押し縮められて、以前の島民は遂には島の一方に追ひつめられて、辛うじて生命をつなぐ丈の牛活しかできなくなつて了りました。以前はただ物々交換だつたのが、一にも二にも金で無くてはならなくなる。遠海漁獵が嚴禁される。さうなると、優越人種としての彼等の倨傲心を満足さすべき、何らの生活をも保持する丈の自由さが全然失はれて了つたのです。彼等は歸化せねばならなくなりましたが、彼等歸化人位みぢめなものはありませんまい。

内地人が入り込み、人口が殖えるとまた島全般に亘つてもいよいよ繁雜しくなりました。遊女屋も出来るし、警察も出来るし、裁判所も建てば監獄も建つ、従つて罪人も生ずる。

それでもまだ初めの頃は香氣千萬なものだつたさうでした。たとへば、骨牌など引いて監獄にぶち込まれた者共が、夜になると抜け出して、濱へ出て卵を生みに上つた正覺坊を引つとら

へ、それを賣り飛ばして、その金で遊女買をして、夜明には澄まして獄窓の中に歸つてゐる。まるでお話のやうですが實際だつたさうです。流石に太平洋の真中だからそこは内地と違ひます。

私はその島に渡つたのは、それから四十年も後の事です。その島へ上ると、私は第一に亞熱帶の強烈な光と熱と、熾烈な色彩と、會て見た事も無い南洋植物の怪異な形態とその豐滿な薫香とで先づ卒倒しさうになりました。次いで、南洋式の丸木舟に驚き、砂濱で髪の毛の氣をむしりつぶしてゐる肥滿した黒人の婆に驚き、紅い豆畑に大きな眼鏡をかけ灰色のジャケツに紅いスカートを穿いた白哲人の金髪に驚き、以前は人を喰つたといふ老黒奴の神妙に奉仕してゐる魔法使ひのやうな西班牙貴族の癩病婆に驚き、丸木舟を大きなお尻で二つに割つたといふ山羊飼の黒坊娘に驚き、デヨーデ、ワシントンと云ふ久留米耕の單衣を着た黒ん坊の青年に驚きました。次いで、また陽物の形した白檀の根つ株ばかり拾ひ集めたり、珊瑚や信天翁の羽根と一緒に、北齋や廣重の版畫の中に雜魚寝したりしてゐる傳説中の太平の老逸民を見て驚き、次ではまた廢れ果てた監獄の庭に咲き盛つてゐるビーデビーデの花や赤い礎草や佛草花の繪模

様に驚き、二三寸も埃がたまつて子供たちの芝居の舞臺になつてゐる裁判所の法廷を見ては驚き、それからすばらしく瀟洒な白尖塔の教會を見て驚き、それからまた完美した植物園と、堂々とした大理石の鳥司の頌徳碑に驚き、役所で鶯の啼き合せをやつたり、午後からは濱へ出て鯉ばかり釣つてゐる呑氣卒極な役人達に驚き、煙草だけは現金で願ひます、他は現金でお買ひ下さる方には二割引致しますと書いた商家の張札に驚き、質屋と乞食が見當らず、若い女と酔つばらひの見えぬのに驚き、島全體が共産的なのにも驚きました。

それにまた、蝮その他の害蟲もゐず、蛙もゐなければ蛞蝓もゐず、ただ油蟲と蟻の猛勢なのは驚きましたが、雀も鴉もゐず、鶯ばかりが内地の雀ほどに啼き競つてゐる麗明さにも驚きました。それに獸としては山奥にペルリの放した鹿の子孫とかが二匹ゐるばかり、あとは牛と山羊と猫と鼠の少々だと云ふのにも驚きました。

かう云へばまるで極樂世界のやうですが住み馴れて見ると、流星に鳥は鳥でした。せせこましい小地獄。

第一にみじめなのは歸化人の部落で、何もかもが幻滅の悲哀の底に陥ちこんで、生氣も無け

れば金も無く、食うや食はずで南洋のグラム島あたりに移住するのが相次ぐ有様でした。残つたものは殆ど日本化して了つて、日本人の娘と結婚する事を何よりの光榮として、その鼻息ばかりを窺つてゐました。監獄と裁判所とが荒廢したのは東京のそれらと合併したので、罪人が一人出れば巡査が遙々一人は附いて上京するので、高が煙草の葉一枚發見されても東京地方裁判所に廻される。つまりは莫大な巡査の旅費だけが殖えて來るといふややこしい事になつて了つてゐたのでした、それに鳥司の頌徳碑は鳥司自身が島民を強ひて自身を祭らせたので、いづぞやは巡檢の侍従の前で赤恥搔いたといふ話もあります。

島に若い娘がゐないのは、たゞ一時の虚榮に走つて都會の空に憧れて奉公に出拂つて了つたので、酔つばらひがゐないのは金が無いので酒も飲まれず、たまたま夫婦喧嘩でもした小役人が、その晩すぐと遊女屋に飛びこめば、とくの昔にその喧嘩の次第が相手の女に知れて居り、質屋が無いのは質に入れば、たちまち島中に知れわたる。乞食になりかけると、直様、内地に追つ拂はれる。共産的で面白いと思へば、すべての利潤の多い生産業は殆ど島廳の事業で、うまい汁は鳥司が吸つて、あとはたゞ辛い奉公といふだけだし、何さま島中の總現金が二千圓

といふ哀れさで、そのせち辛さは想像にもつかないだらうと思ひます。
商店の現金二割引もつまりは現金が無いからです、殆どが物々交換の習慣が残つてゐるので、何もかもカケで、現金は船の入る時拂ひ。だから買人が有つても品物が有つても、商人はただ有りませぬの一點張、これでは繁昌する目當はありません。ですから諸商賣が凡て痺靡して振ひつこは無いのです。

漁師にしても、どうせ人口には限りがあるので、澤山漁れば値が廉くなる、それで慌てて少く漁つてすぐ引き歸す、早い勝ちですから、漁業の盛んになるわけもありません。

百姓の小柄巧と狡るさとも頂上です。冬の最中に茄子や南瓜が生つても、わざと小さいのを東京に高價で送つて了ふ。だから島で買はうと思へば凡て東京相場で、目の飛び出るほど高いので、自分で畑でも持たない限りは、バナナ一つでも容易には口に入りません。

正覺坊にしてからがすぐに殺して罐詰にして送り出す。島の者は漁師で無い限りお裾わけはしてもらへません。牛を一ヶ月に一匹殺しても殺した日に賣れ切つて了ふので、遅く市場へ行つたものは買ひ損ふ。一ヶ月に一度の牛肉がこれだから、市場はまるで餓鬼道の騒ぎです。

鶏卵を食べようと思へば鶏からして東京から取り寄せねばならず。豆腐を食べようと思へば、一週間前に約束して置く。ランプのホヤが壊れば、別のランプを買はねば、夜も眞つ暗でゐなくてはなりません。

商人の狡猾と奸譎とは、殆ど日本中搜しても、あれほどのところはありますまい。物價は東京の三倍以上だし、物資は缺乏してゐる。たまに豫定に三日も遅れて内地からの船が来れば、その以前に早や、島には米も無ければ味噌醬油も無く、菓子も無ければ酒も無い。島民は半死半生です。

三

だから月に一度、内地からの定期船が入つて来る日の騒ぎと云つたらありません。その船は新聞、雑誌、書簡、小荷物、流行唄、あらゆる文明の最新情報をもたらして、この無聊で倦怠しきつた島をまるで戦場のやうに緊張させ、亢奮させて了ひます。島民は物質的にも精神的にも餓ゑ切つてゐるのです。船がいよいよ着くといふ日の朝などは海拔一千尺の船見山の絶巔に

登つて、水天のあなたに一抹の煙の上つてから殆ど四五時間といふのは坐つたきりで凝視して
ゐます。近づいた船がその岬の一角を曲つて、いよいよその灣口に入りかけて、ぼろと汽笛を
鳴らす時の深厳さありません。それをきくと、島中がまた、たどわあと聲をあげる。

島中の者が、白哲人も黒奴も顔の黄色い日本人も凡てが波止場に群つて、巨大な萬年青や龍
舌蘭の蔭から押しあひへしあひ、新來の客を覗見したり、批評し合つたりしてゐます。たゞ譯
もない憧憬と好奇の心を持つて、その時はまるで島中が小娘のやうにワクワクしてゐます。

船が出て行つて了ふと、島はまたぐつたりと疲れて、火の消えたやうです。さうして狭い離
れ島の天地が、それからはまた一層、狭く小さく縮こまつて了ひます。

新來の内地人に向つては、その初め好奇と憧憬とを寄せてゐた心が、間もなく理由のない敵
意となり反感となり嫉妬となり憎悪となり迫害的に推移して來るのも、一種の島人根性です。
殊に島の官權は、それらの人々に向つて、全然島の平和を害する擾亂者とし、侵入者とし、罪
人視し、極端に之を拒避しようとかかる傾向があります。

私の連の女性の一人が紫色の羽織を着てゐるといふので、島の若い者の性慾を刺戟する怪し

からぬとその筋に訴へ出た者もありました。
殊に島民の『肺病』を恐るゝ事は極端です。而してその恐るべき病毒の傳播者は凡てが内地
からのそれら旅人にあるとさへ思ひ詰めてゐます。尤も肺病患者の多くが、南方の極樂島とし、
理想郷として、充分の保養を目的に、その地の小學教員、郵便局員などに轉任させて貰つて來
るのも多いのです。然し駄目です。その肺病患者が八丈島あたりに寄港する頃は、もう電報が
小笠原島まで飛んでゐます。

ハイビヤウナンニンヌクチウイセヨ
だから堪りません。その人が島へ上る頃にはもう島中に知れ渡つてゐて、宿屋でも断れば飲
食店でも断る、理髪店へ行つても『肺病お断り』と書いてある。仕方なく泣きの涙で磯濱や、洞
穴の中にバナナの葉でも藉いて夜を明し、木の果をあさり、遂には三日とゐたたまれずに歸り
の船で追つ拂はれて了ふ。さういふ時、島中が眼です。中には宿屋から断られ、困つて、土地
を買ひ家を買つて、いざその家へ這入らうとすると、周圍から立退請求です。自分の家へ自分
の身さへ置くに置かれず、草に臥し、荒磯に寝ね、やつと次の便船で歸るには歸れたが、その

途中で血を吐いて死んで行く人もありました。さうなると島民の慘酷性も頂上です。

私は肺病だつた私の前の妻と、その友人の同じく肺病だつた女性と、その妹とを連れて、殆ど命懸けに身を投げ出して、保養の地を求めに行きました。ところがさういふ風です。私たちは心の底から顫へ上つてただ面と面とを見合せました。秘密！秘密！どうにでも極秘にしなければ四人とも生き死の慘虐な目にはねば濟みません。その間の私の心労といふものは無かつたのです。私の妻ももう一人の幾度か血を吐きました。そのうちに健康だつたもう一人のも肋膜炎になつて了りました。丈夫なのはたつた私一人です。醫者にも診せられません。診て貰つたら、すぐに肺患者だと云ふ事は島中に知れて了ふのです。空氣は乾燥する、島中は白眼を以て意地わるく追求する。病人はわるくなる、それを極秘にしなければ命にかかはる。——この間に私たちはまた一文なしになつて了りました。私の小笠原渡海をただ詩人の好奇的遊樂と思つて、色々に笑つてゐた人々も内地にはありましたが、今だからすつかりお話しします。そんな呑氣な事では無かつたのです。

そのうちに同じく肺患を秘密にしてゐた小學教員が、その病の重くなると一緒に露見して、

追つ拂はれる。同じやうな郵便局員が死にかゝる。それを内地から看護に遙々と来た母親が死ぬ。——目も當てられぬ悲劇が次ぎ次ぎに私達の周圍には起ります。今日は人の身、明日は自分の身の上といふ、その恐ろしい絶望が刻々に私達を青くして来る。たまらなくなつて、やつと金の工面をして二人だけは内地へ歸し、一旦は妻と居残りしましたが、その妻をもまた二ヶ月の末に歸し、いよいよ最後の一人となつて踏み止まつた時、私はそれこそ一文なし。處は絶海の離れ島です。人情は冷酷、金は無し、これからの苦しさは全くお話しはできません。そのうち一と月経つて私はまたやつとの事で歸航の船に逃げ上りました。さうして歸つて來ると、妻はもう貧乏がいやになつたから別れたいと云ひます。何の爲めに私はその二三年命を投げ出して苦しんだか。——その後の私は全く、一時は全世界の女性を呪つて了りました。

この事は追つて、私は書きます。

私が島を立つ頃に、その粟粒ほどの小天地にも、恐ろしい一騒動が起りました。島司排斥の爆發です。それが爲めに私までがその渦中に巻きこまれて、殆どその煽動者かの如く島司一派から憎まれました。暴虐と壓政と自派擁護と、それらを、鼓を鳴らして駁撃する所謂正義派な

るものも、矢つ張り離れ小島の正義派です。佐倉宗吾氣取りの某々の如きも結局は哀れな小名譽心の傀儡です。と思ふと氣の毒でもあり、をかしくもあり、迷惑でもありました。

恐ろしい事には、反對派の一人二人がたゞ何氣なく山路で行き遇はして一言一言、何かささやいた、それさへ、その日には役所へも島中にも知れ渡つてゆく事です。

そればかりでなく、その朝電報爲替が何圓誰それに送つて來たと云ふ事もその書には島の商家にはチャーンと知れ渡つてゐます。私もやつと金を送つて貰つて一息つけるともう、片つ端からせびり取られて了ひました。そしてまた元の一文なしで煙草一つ吸へなくなりました。

島は浮世離れてゐるやうで、却て、浮世それ自身を、縮圖してゐます。

島の自然の麗色など悠々と觀賞してゐられるものですか。かうなると自然は人間から思ふさま踏みにじられて了つて來ます。

文明と云ふのも中途半端ではよしあしです。

童 心 終

卷 末 に

本集は時折に書きとめて置いた小品散文詩の類、その他詩社の文抄、自他の著書に於ける序や跋、日記、小説、所感、隨筆中の一節等を稍年次的に、多少の秩序をつけて一通り蒐めて見たものである。往年公刊した「自秋小品」に漏れた分に、合せてその後の作の大部がは入つてゐる。主として詩歌三昧に住して來た私の此の五六年間の生活の自解ともなるべきものであり、またその傍註ともなるべきものである。

今、それらの一々に就いて多少の細説をする傍、私はまづ私の此の數年間の生活の經過を兎に角書きつけて置く必要がある。

大正二年の暮春、私は家を舉げて相州三浦三崎に移つた。さうして第一の妻との新しい生活が初まつた。同年九月同地の見桃寺に移つた。翌年二月肺病の妻と同病の某家の姉妹と四人で小笠原父島に渡つた。淹留數月、其處で非常な酸苦を嘗めた。妻と二人のその友人を前後して歸京さ

したあと、七月まで私一人居残つたが、やつとの事で歸ることができた。生命を賭して護つた妻の病は癒えたがあまりの貧しさに妻の虚榮心を満す事ができなかつた上、全然二人の行く可き道が違つて來たので別れて了つた。それから麻布の寂しい貧しい生活が続いた。これより先、三崎の見桃寺にゐた時初めて自分の詩社を創つた。巡禮詩社がこれである。それがやつと麻布に落ちついてからその機關雜誌も出すやうになつた。『地上巡禮』がこれである。『地上巡禮』はその後、弟と阿蘭陀書房を創立するに當つて雜誌「アルス」と合併した。翌四年「アルス」が廢刊すると、詩社の事業も一時中絶して了つた。當時の著書には「印度更紗」の『眞珠抄』と「白金の獨樂」の二巻、歌集『雲母集』それに抒情詩抄「わすれなぐさ」等がある。『眞珠抄』は三崎在住の時に書かれた短唱の集であつた。

五年五月、私は第二の妻を得て、葛飾の眞間に移つた。六月末、同じ小岩の三谷に移つた。さうして紫煙草舎を創つた。巡禮詩社の後を承けて更に面目を一新しようと思つたのである。そこで雜誌「煙草の花」を出した。これは二冊きりしか出なかつた。紫煙草舎の生活は赤貧を極めたが、閑寂で

もあり、眞純でもあつた。犬と鴉と子供と雀とが私の遊び相手であつた。葛飾小品が此處で書かれた。『雀の生活』を書き出したのもその葛飾の三谷の冬枯の頃であつた。歌集『雀の卵』を編輯しかかつたのもその夏の頃であつた。此の歌集は十年の今日までまだ完成しないのである。六年の初夏、深く決意するところがあつて、紫煙草舎を解散し、東京に出た。本郷動坂の極貧な長家生活が初まつた。舊門下達が歌の方は曼陀羅舎を興して雜誌「曼陀羅」を發刊し、詩の方は巡禮詩社を復興して雜誌「詩篇」を發刊した。私はたゞ顧問として之に臨んだ。曼陀羅舎は後に改革が起つて、第二の紫煙草舎となり、雜誌は曾ての私の雜誌「サムボア」の名を繼承することになつた。

此年、阿蘭陀書房は人手に渡つて了つた。七年の春、病妻の看護の爲め、相州小田原のお花畑に轉地して一家を持つた。この當時、東京に残した紫煙草舎の舊門下の幹部の態度が、表面、私と私の曾ての「サムボア」や草舎の聲名を利用する事のみ知つて、その精神の傳承を全然忘れたばかりか、却つて人として私に對して反逆の傾向さへ示したので、その顧問たる事を斷つた上、紫煙草舎と「サムボア」の名義利用を謝絶し

た。愛して裏切られた私は以後再び自ら詩社を興すとか、歌壇に立たうとする意志さへ無くなつて了つた。やつぱり一人ぼつちであると思つた。眞の藝術の道は一人で行くより仕方のないものであつた。私に終始一貫して苦衷を保つてくれる人たちもゐた。その人たちも私と一緒に無言になつて了つた。巡禮詩社の方は今なほ少しも渝らないで「詩篇」を續刊してゐる。その後私に反逆した人達はやはり雑誌「秦皮」を出してゐるが、この雑誌の名も私が曾て計畫した雑誌の名の借り物であるし、その形式も殆ど私のもので模倣ばかりで、表紙その他も第一期の「ザムボア」のものを私に無断で使つてゐる。かうして形式はすつかり自秋であつて、それ以外に眞に藝術上の反逆も爲し得ない卑屈と隋弱とは、永い間何くれと手鹽にかけて來た丈涙も出ない苦しい思をさせられた。私の旗指物を續して遂に私に向つて來られる位苦しいものはない。この矛盾した二重の苦しみからお花畑の生活も快々として樂しめなかつた。

貧しさにも堪へられなくなつて私は妻と二人で家を疊んで同地の傳肇寺に間借することになつた。閑寂ないゝ生活が初まつた。私は「葛飾文章

や「金魚經」や「雀の生活」を書き續けた。

八年の夏同寺の隣地に舊門下の喜捨で小さな木兎の家が建てられた。さうしてこの家で、「雀の生活」が完成した。

九年になつて、私の十數年間の永い酸苦な藝術生活が、次第に物質的にも酬ゐられて來た。それに弟の鐵雄も再び書房「アルス」を創立したが、愈好運に向つて來た。

それ迄の間の作品である。

その後の事は、あまりに生新らしい。あまりに突發的な妻の反逆によつて、それは妻自身さへ思ひがけなかつた意外の推移から、何も彼も破壊されて了つた。閑寂も閑寂でなくなつた。たゞ非理と非道と殘虐な病的の人情とに向つて、苦しい永い忍従と愛と謙讓とを私は自ら教へられたばかりであつた。欲しもしない名聞や俗世相の中へ引出されたり、破壊され盡した木兎の家の精神生活からただに形骸のみの新館を、ただ責任感のみで、建て徹さなければならなくなつた丈のものであつた。さうして私がただ無言である丈、不愉快な訛傳や誤解が身邊に霧集してゐる。あまりに私の生

涯は不幸な波瀾に富み過ぎてゐる。

貧しいより幸な事は無い。私は貧しい時も、稍豊かな現在も少しも私に
 滲りは無い。が、大概の人はかうなると気が緩んで身分以上の浮華な虚榮
 の爲めに身を謬つて了ふ。あれほど私と酸苦を共にしてくれた妻も愈々
 物質的生活に餘裕がついて来るやうになると、すっかり私の閑寂の道づれ
 では無くなつて了つた。さうして私の爲る事があまりに隠遁的にも馬鹿
 らしくもなつたに違ひなからう。通例の女性としては無理も無い事では
 あるが、私の行く道とはそれはあまりに違ひ過ぎる。私はやつぱり一人ぼ
 ちで行くより外に仕方が無い。

名聞や衣食住の榮華は畢竟は浮べる雲のごときものである。幻の幻に
 過ぎない。私はもとく、世俗に於けるさうした所有慾は持ち合はさない
 責任さへ果して了つて棄てる時さへ來ればいつでもさらりと棄てて了ふ
 であらう。

さて、本集を讀まれる方は以上の生活の年次を念頭に置いてからにして
 ほしい。簡単に各章に就いて註をすると、

童 心

「漁村の秋」は三崎生活の一部を小田原で書いたもの。「麻布山」は麻布時
 代。「童心」は葛飾、その他は小田原である。

巡禮詩社文抄

詩社の言葉は三崎見桃寺で成つた。その他は麻布時代、「地上巡禮」誌上
 に載せたものである。

紫煙草舎文抄

「草舎の言葉」は葛飾、解散の辭は本郷動坂に出てから書いて、雑誌「曼陀羅」
 創刊號に寄せたもの、「新芽は萌えよ」はその次號に、舎中のあまりに不甲
 斐ないのを歎いて書いたものである。藝術上の反逆をせよと私は涙
 を流して切言したが、遂に彼等はさうして眞の反逆は爲し得ない代り
 に人としての反逆を企てて了つた。

群蝶の舞

『雀の生活』の「一羽雀」は葛飾で初めて書いたもの、一章である。その他
 は小田原で書いた。これは曾て公刊した『雀の生活』のほんの一部に過

ぎないが、私の閑寂生活の或る表現として無くてはならぬもの故、こゝに抄出して置いた。

『海の畫の解説』その他は小田原で書いたものである。

蠶豆の連珠

三崎で書いたのが、「東京景物詩餘言」、「眞珠抄序」(「永日抄序」をふくむ)、「波調私見」等である。

麻布で書いたのが、「印度更紗」、「白金の獨樂」、「わすれなくさ」、「木の葉のさゝやき」等の序。

葛飾で書いたのが、「眞間の閑居序品」、「月に吠える序」等。

動坂で書いたのが、「愛の詩集のはじめに」

その他は小田原で書いた。その中「よぼく」巡禮藝術觀は小説「よぼよぼ巡禮」中の抜書である。

南海異聞

「小笠原の夏」は葛飾にゐた時、その「夜話」は小田原本木兎の家で書いた。當時の追憶である。

南海異聞

「小笠原の夏」は葛飾にゐた時、その「夜話」は小田原本木兎の家で書いた。當時の追憶である。

その他、詩歌以外の私の作品、斷簡零器と云つた風のもの、は可なり多いやうに思ふが、頁の制限上今度はこれ文に止めた。

大正十年暮春

白 秋 識

大正十年六月十五日印刷
大正十年六月十八日發行

(童心)

金貳圓



著者

北原隆吉
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者

和田利彦

印刷者

東京市京橋區西紺屋町二十七番地
橫田秀治

印刷所

株式會社 秀英舍

發行所

東京市日本橋區通四丁目五番地
春陽堂

目錄
呈錄

(電話本局五一七番)
振替東京一六一七番

□ 名家創作集 □

尾崎紅葉著	紅葉集	(全四册)	(全作集)	各册二圓五十錢
幸田露伴著	露伴集	(全二册)	(長短篇集)	各册二圓十二錢
福地櫻痴著	櫻痴集	(全二册)	(長篇集)	各册二圓十二錢
泉鏡花著	鏡花集	(全五册)	(長短篇集)	各册二圓十二錢
泉鏡花著	雨談集	(長短篇集)		定價二圓八十錢 郵送料十二錢
村上浪六著	浪六傑作集	(全三册)	(長篇集)	各册二圓十二錢
小栗風葉著	風葉集	(全二册)	(長短篇集)	各册二圓十二錢
永井荷風著	荷風全集	(全七册)	(長短篇集)	各册二圓七十錢
塚原澁柿著	澁柿集	(全二册)	(長篇集)	各册二圓十二錢
鈴木三重吉著	三重吉全集	(全十三册)		各册一圓六錢 送料各册六錢
幸田露伴編	西鶴文粹	(裝幀艷麗)		定價二圓三十錢 郵送料十二錢
尾崎紅葉編	阿彌脚本集	(全十五册)		各册三圓五十錢 送料各册十八錢



